

550
57

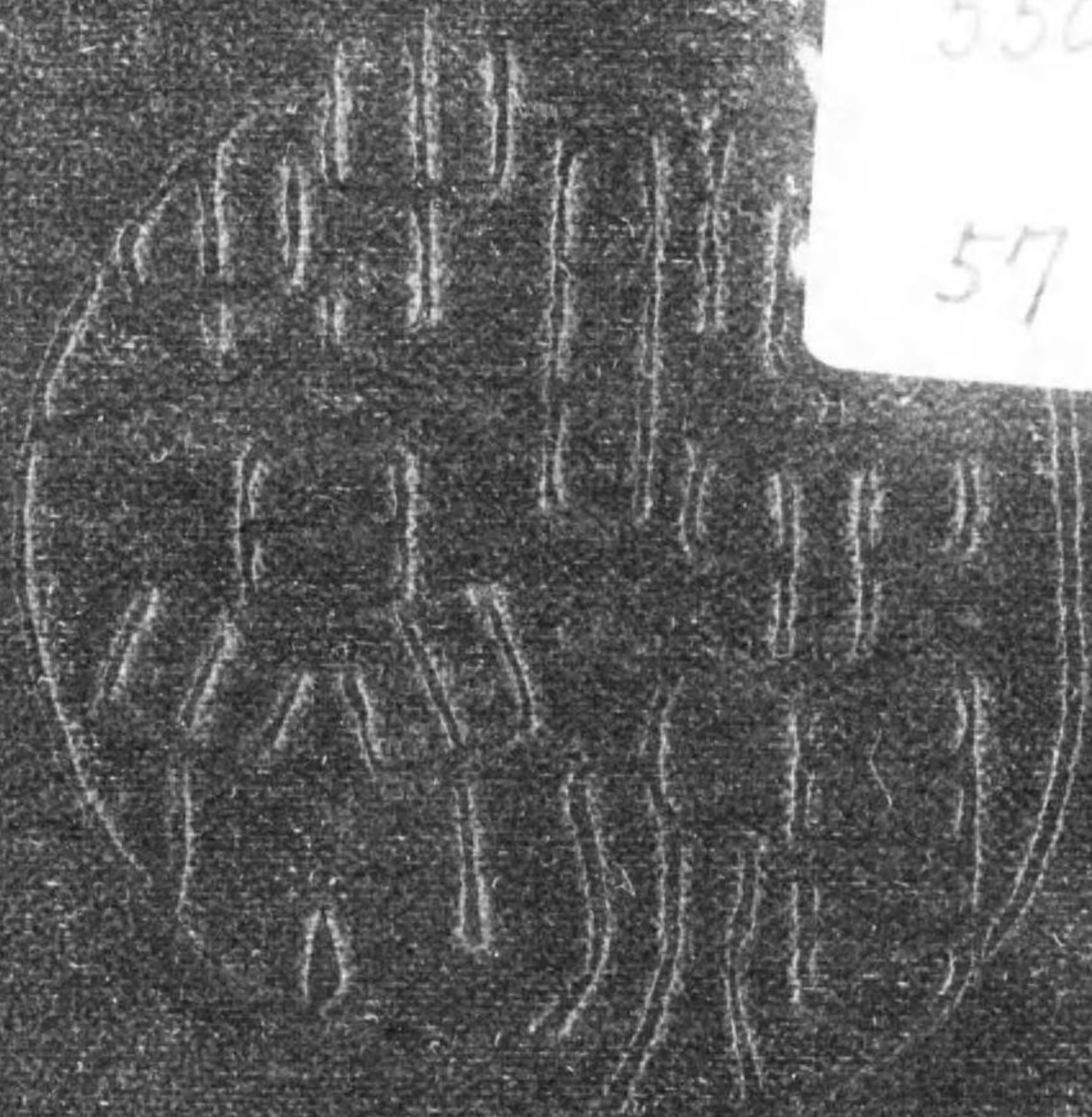


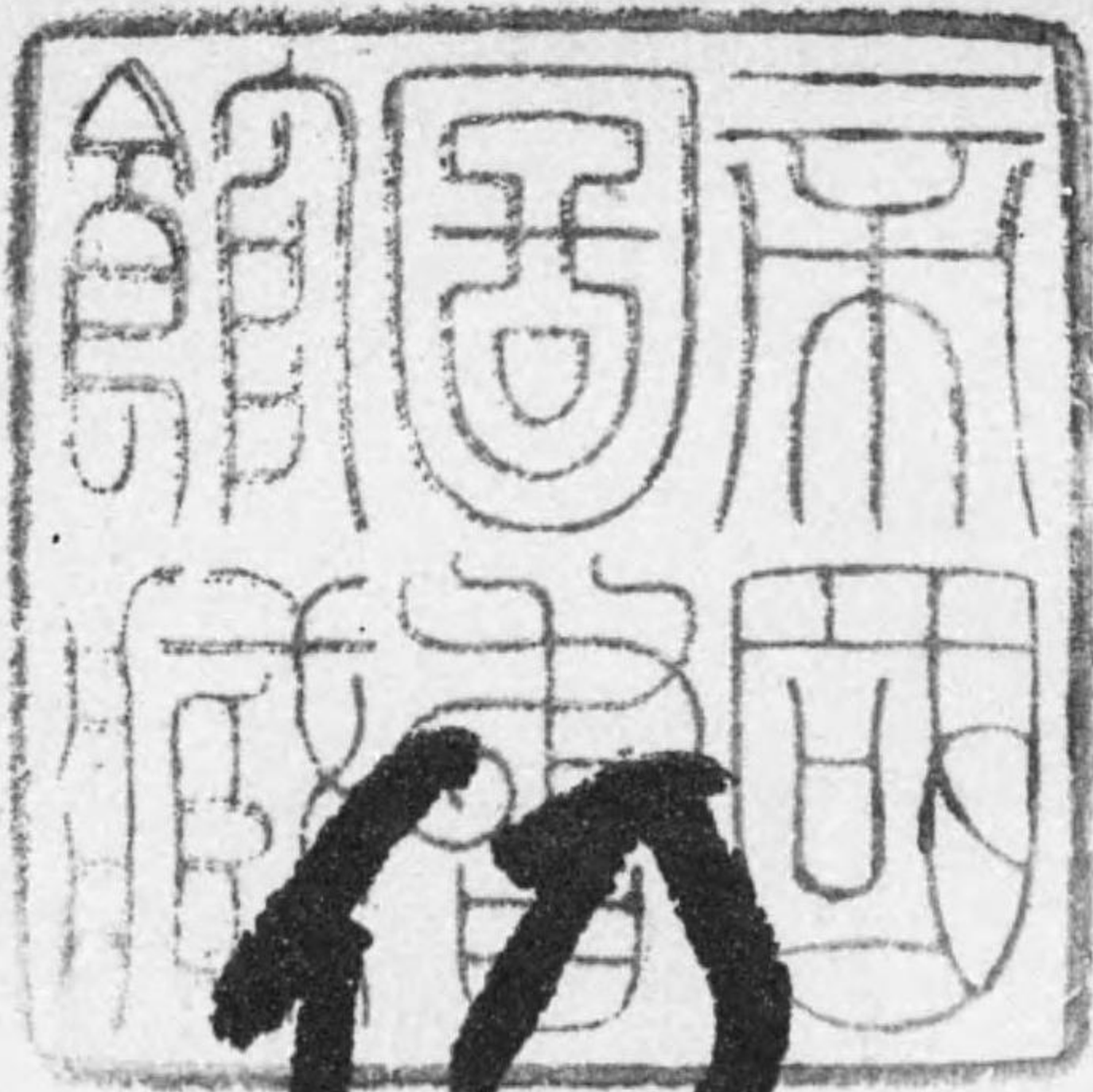
始



550

57





竹
丸
付

大正
15. 6. 9
購求



550-57

仍如件

仍如件

千年の名跡、塵外の靈場、稱揚讚佛の聲は松華の朝の嵐に伴ひ、歌唄頌徳の響きは荷
 葉の秋の霜に連れて、修因感果の雲に包まれつ、不斷淨戒の表に聳ち、見上ぐれば四
 岳八峰の蓮華に似たる山また山の頂、一山の草木も悉く觀法の定座となり碩學の權者
 も悉く示現の赤子となり、凡俗草鞋の脚をもて登ること僅に三里の路なれど、圓滿具
 足の心もて達すること遙に億萬里の境といへば、誰も知るべき我國の南海に大師入定
 の地として紀州の高野山、
 峨々たる山下の周圍七里四方、坦々たる山上の平地一里四方、嵯峨朝の弘仁七年この
 山を開いて法燈を掲げしより浴く朝野の俗界を照らし來りて、天正年間の頃は寺領十
 二萬一千石を有し、織田家の武威に其十萬石を削られしが、徳川氏の歸依また三千石

を附して二萬四千石に養はれたる一山の僧侶三萬人、これを學侶と行人と聖の三派に分ち、金剛峰寺の下に寶門派の寶生院と壽門派の無量壽院ありて、おのゝ所屬の寺門に合すれば三千坊舎、大門より奥の院に至るまでの在家商人は西院町と小田原町を合して千二百軒、山岳は南海の雲を凌いで聳えながら空に一陣の風なく、樹木は満山の天を摩して蔽ひながら地に一點の塵なく、無垢の清水こゝに玉を碎いて縦横に流れ、清淨の僧侶こゝに心を澄まして日夜に往來し、瑜珈の大智を發得せる靈跡の上に魚鳥の肉なく、萬籟の寂寞を感應せる總院の下に色慾の念なく、隨喜渴仰の紫雲は西にありと雖も、即身成佛の靈跡は正しく南の高野山にありて、人間そのまゝに現じ出す一場の佛陀界、時は寶永年間、元祿の後、正徳の前、江戸は諫鼓苔深くして徳川家の五代を傳へし綱吉將軍の頃、世は荊鞭蒲朽ちて太平の風流に華奢の小唄を歌ひし歌吹海の頃、もし物の語り草をいへば數年前に赤穂の四十七士が吉良家の夢を破つて討入り

し騒動と、日本一の富士山に俄の瘤を吹き出して寶永山の現はれしとのみ、まして俗界を離れたる千古不滅の靈跡、十二萬石の寺領を有して坊舎三千僧侶三萬の古昔に及ばずと雖も、高野山上の戒壇に眞言一宗の法燈ますく輝いて、化行灌頂の修行いよく長に嚴なるのみか、固より肉色一切禁制の外、さらに人間糞尿の汚穢まで厠に置くを禁じて、いづれの寺門にも縦横自在に流る、山水を幸ひ、これを汚道川と稱へて其の水流に落し込めば、三里奔湍の下に大瀧となつて雲散霧消し、居ながらに現世からなる極樂淨土の玉の臺といふ、その高野山第一の伽藍を備へたる壇上の中央、そもく、大師この山を開きし時の案内者を祭りし高野明神の社前、わけて清淨無垢の靈場とせるところに何事ぞ、一日の曉、臭氣紛々、こてくと左巻の太糞を垂れて積み上げたるものあり、加之も其糞の太く逞しき體は古今にあるまじき不思議の言語道斷、いかに鼻を蔽うて

首を捻るも人間の仕業とは思へぬ奇々怪々、およそ五六寸ほどの太さを一丈あまりの長さ、千石船の纜を解いて積み上げたが如くに渦巻きぬ、さりとして糞は糞なり臭氣といひ色澤といひ正しく人間の垂れし糞に相違なき以上、やれ怖ろしや此の大糞を無遠慮に垂れし奴、そもくいかなる母の胎内に生れし大の男ぞ、満山の僧俗を驅り集めても六尺の上に首のあるものなし、さては外より入り來つて高祖千年の靈跡を一朝の糞白癡にせんとする末世巨大の曲者ありと、俄に總院の鐘を撞き鳴らして空前絶後の糞騷動となりぬ、

千古不滅の靈跡を保てる清淨無垢の高野山中、加之も開山の因縁いと淺からぬ壇上を汚して明神の社前に積み上げたる例の臭氣紛々、その不思議の大糞を取圍んで一山の僧侶こゝに鼻を掴みながら、小田の蛙の啼くが如き評議まちく、

「や、なるほご、これは言語道斷、いかにも奇怪千萬ながら、さてく見れば見るほ

ご古今獨歩の業、ふしぎに美事な汚れで御坐るわい」

「しかし、人間の糞は人間腹中の汚物を腎の穴より排除いたす外、いかなる巧妙の細工人も手先の器用で作出す筈も御坐らねば、いよく人間の糞と致したところで、これほごの太く遅しい大糞をする奴が御坐らうか」

「さればさ、そもく釋尊は丈餘の御身にあらせられたと聞き及ぶが、末法末世の人間界に斯ほごの立派なる巨糞を物の美事に放り出すべき奴、あるべき筈の道理が御坐るまい」

「無いと云はれても現在この體ぢや、正しく人糞で御坐るぞ」

「いかにも怪鳥の糞でなし、奇獸の糞でなし、疑念もない人糞々々、第一この臭氣が身を取つて各、争はれぬ覺えの證據で御坐らう」

「もし満腹の五臓六腑が腐ッて糞になるべき病人の口中より、堪らず一時に吐いたものでは御坐るまいかな」

「萬一、左様な奇病あつて口より吐いたとすれば、苦しまぎれに散亂いたす筈、それが宜しく剛柔の中を得て、繩の如く左巻に堆く積み上げた工合、よほぎ腹加減の善い奴と見えまするな」

「いよく人糞とすれば、その腎相應の人間あるや否や、猶更以て判断に苦しみまするぞ」

をりしも本山の金剛峰寺より長者の老僧一人こゝに歩み來りて、隙間なき衆徒の衣の袖を掻き分けながら、雪の如き眉を擧めつゝ、暫時その大糞を打守りしが、果は老の兩眼より涙はらくと流しぬ、

「いづれも無言、つらく事の體を考へ見れば、令法久住の靈跡には古今あるまじき

此の大汚物、突如こゝに斯く現在の實形を現はして堪へ難き臭を一山に發する所以、正しく高祖大師が心行懈怠の我々を戒め給ふ方便と覺えまするぞ、聞きも及ばる、筈、古昔この野山に名を得られし華藏院の覺海僧正は、法燈守護の大念願を發して忽ち身を大天狗と變じ、あれ見られよ、かゝる山また山の頂上に猶かつ雙峰の高山と數へらるゝ、其一を覺海山と名を呼ぶは紛れもない、あの雲近く人跡を絶ちて鬱蒼たる寂寞無聲の中に今も棲はるゝ僧正が、大師の感果をうけて眼前の諭戒を示されし業に違ひなし、いづれも有難く近寄つて無量大智の現實を拜跪せられよ、南無大師遍照」

さては天狗の糞、覺海僧正でも元は人間、羽翼が生えて飛んでも流石に糞だけは變らぬ臭氣ありと、四面繞圍の衆徒おもはず感動しながら、現在この大糞を這ひ寄つて舐め盡すほごの隨喜渴仰に至らねば、やうく鼻頭の抓み手を取外せしのみ、たゞ目と

目を見合して打守る中より、白袈裟をかけたる十六ばかり新發意一人、ぬツと中央に飛び出すや否、からくと大口あいて高く笑ひぬ、

「大師の示現でもない天狗の仕業でもない、この大糞を垂れたのは此の小僧ぢや、三日の糞を放り溜めて太い竹筒より押し出した工夫、はッはッはッはッ」

千古無垢、清淨戒壇を自己が廁と心得、臭氣紛々たる三日の放溜を太き竹筒より押し出して、人間にあるまじき天狗の糞騷動に一山を嘲弄せし言語道斷の曲者、みれば明王院の新發意に宥観とて今年十六の白袈裟小僧なり、
そもく高野山の制として門主法印を除くの外、一山いれも悉く黑白二様の木綿袈裟に分ちて、登山の修業いまだ十年に満たざるものは眉雪の老僧と雖も白袈裟をかけ、既に登山の修業十年を越せしものは若輩の青坊主と雖も黒袈裟をかけ、一目こゝに年

齡の長幼よりも修業の深淺をもて其の新舊を分てる中に、わけて今道心の新發意その白袈裟をかけたる十六の生々しき小僧が、大木の一葉にだも如かざる法端道末の身を以て、現世現在この玉の臺を三日工夫の大糞に汚したる振舞、外道の化身なり惡魔の所爲なり羅刹波旬の變化なり、うかくすればあの糞を隨喜渴仰の涙もろとも我等に舐めさせんとせし奴、宜しく柔和忍辱の法衣を脱ぎ慈悲愛染の法心を去り、倒さまに引ッ捕へて大師廟前の坑に埋め殺すべしとの評議、満山を動かさぬ、

されどもまた瞋恚執着の念に反する一派ありて、たとひ鬼畜の惡業にせよ。この靈跡に鐵山衆合の地獄を現せんこと却つて高祖の本意にあらず、まして斯る曲者の他より入らずして同宿法窓の中より出でしは、世間の俗界に野山の末法衰微を示すに似たれば、宜しく法衣を剥ぎ袈裟を奪ひ丸裸のまゝ山を追ひ下すべしとの議論を生じぬ、
時に以上の二派を破りし一派の議ありていふ、石子詰の刑は古昔より當山の沙汰と聞

ゆれぎ未だ曾て行ひし事なく、また現在これほぎの曲物を身體そのまゝ、無事に山を下すは一山の戒め薄きに似たり、されば幸ひ壇上を汚せし罪と明神への清めに山下より名を得たる在家の大力を呼び上せ、最勝會の相撲に彼奴を引き摺り出して、投げ殺さるゝか不具になるか萬が一にも助かるか、宜しく時の運に任して明神の活殺自在を伺ふべしとの議論、竟に一山を制しぬ、

この最勝會の相撲は年々五月、この野山第一の法樂として壇上の中央に土俵を築き、開山案内の神意を報謝せんがため、一山の僧侶こゝに出でて山下在家の百姓と東西に分れ、おのゝ必死の勇を奮ひつゝ、勝敗を争ふこと二日興行の例なれば、かの宥観小僧を呼び出して大力の敵に番はしめ、たとひ生命を免れても首骨を挫くか腰骨を折るか、今年やうく十六の新發意、もはや満足の五體を保つまじとて總院の評議こゝに一決し、まつそれまでは明王院の師の坊に禁錮せられぬ、

かくと漏れ聞きし宥観小僧、おもはず満面の微笑を含んで青黛を塗れるが如き坊主頭を振り立てながら、面白しく、末世末法の狼狽眼に人間の糞と天狗の糞と取違へて騒ぐほぎの奴等が、たとひ一山を盡して我に向ふとも何の恐るゝところかある、まして最勝會の相撲に在家の凡夫力を以て我を投げ殺さんとは跛者の踵に金剛盤を踏み潰さんとする類、面白しくと紅の舌を吐き出して其日を待ち受けぬ、
時しも五月十二日、最勝會の相撲興行には三日以前、

さらぬも俗界を隔てし靈場の夜更け人定まりし後、一山の草木また寂寞として睡れる真夜中ごろ、明王院の經藏に二日以前より拘禁せられたる宥観小僧、この曉には最勝會の相撲に引出されて蹴殺さるゝか、幸ひ生命無事に取残しても不具となるべき筈の身を持ちながら、生れついたる不敵の根性、そのまゝ、大の字となつて鼙聲雷の如し、

「宥観、宥観」

いづこともなく聞ゆる聲に、おもはず目を見開けば、ほつと射す燈火の光りに師の坊の宥晃、我枕頭に立ちぬ、

「や、師の坊」

聲もろとも一轉、むくりと起き直れば、明王院の住職宥晃房、ことし六十三の老の身を屈め眉を擧めて摺り寄りぬ、

「宥観、死活いよく半夜の曉に迫つたぞよ」

「半夜は儲置いて、刹那瞬刻の眼前も、肉身の生滅に執着は御坐りませぬ」

「それは無常の感想、枯木の仆る、如く自然の命數を知つてこそぢや、まだ法末の芽生に等しい十六の今日、自己みづから死を待つ白癡に半夜と刹那の差別あるかッ」

「は」

「去れ、去れ、遁けて出い、夜の明けぬうち山を下つて他國いづれの空なりとも思ふところへ落ち行け、師弟の因縁、一山を汚した罪は祖師の廟前に宥晃が身を責めて助けるぞ」

「は」

「もし現實、法力呪縛の罪に當らば遁ぐるとも遁けられぬ筈、幸ひ恙なく山を下らば宥晃が身を以て高祖大師の無量慈悲海に浴し得たと知れよ、總院の衆徒いかに瞋恚の執着ありとも、もはや遁け出せし後、この老僧を壇上の相撲に引き出すまいぞ、去れ、去れ」

「はッ、法恩、師恩、身に徹して有難く存じますれど、俗界の在家いづれの土地にも所縁なき宥観、何物の種に生れましたやら、きけば二歳の曉、麓の學文路宿へ捨てられしを師の坊に拾ひあけられ、今日までの御養育に蒼海一粟の報謝も致し得ず、

十六の今、かゝる不淨の罪を残して此まゝ、

「いかにも拾ひあけし時の守札に東國武士某一子といへる七字の外、さらに一葉の草の葉もない身ながら、ゆけば自然また行かるゝ道あつて憩ふべき樹蔭もあるぞよ、親の等しき此有晃と思へば猶更ら以てのこと、去れ、去れ、身を全うして去れ、元來の資性、幼少の頃より一山に誇つて育てしが、かく今こゝに愛別離苦となるも因あつての果ぢや」

宥觀小僧、おもはず頭を垂れて兩手を膝に重ね、肩を凋め身を縮めて木像の如くなりしが、全身たゞ一滴の涙もろとも靜に面を上げぬ、

「師の坊が、皆これ因あつての果ぢやと仰せらるゝ其、その御一言に依つて宥觀もはや何事も、たゞ生あるかぎり、この野山に念は残さずとも、偏に師の坊の在す方を故郷の空と心得まして」

「法界と俗界を隔てゝも心念が通へば自然の縁ぢや、去れ去れ、はや夜の明けるに近
いぞ」

「は、はッ」

五月十四日、いよく壇上の高野明神に法樂供養のため、一年一度の興行、最勝會の相撲を催しぬ、

今日こそは千古の靈跡、糞騷動を起したる外道の振舞、あの明王院の宥觀小僧を引き摺り出して在家の大敵に對はしめ、捻ぢ殺さるゝか、抛け殺さるゝか、但しは萬に一つの運命を取残して不具になるか、悪業の應果を見んとて山上山下より雲霞の如く押し寄せぬ、

山上の衆徒方には學侶派と聖派と行人派の三派より一粒撰に選り抜いて、傳へ聞く古

昔の叡山法師を眼前に見るが如き荒坊主三百人、山下の在家方には大門街道の粉川と名倉と妙寺の村々より力足を踏んで上り来る血氣の荒男三百人、手に不斷の經卷を捨てたる入道頭と、手に平生の鉏鍬を抛ちし百二姓頭と、おのく東西に別れて二日の間は一山を震動するばかりの勢ひ、まして今年は砂煙の外に血煙も立ちかねまじき勝負ありといへば、夜の明けぬうちより人浪を打ちて押し寄せし僧俗の見物、片唾を呑んで寸隙もなく壇上の土俵を取巻きぬ、

此日、かの宥観小僧を敵手として在家方より選ばれしは、名倉村の水呑百姓ながら年の相撲に最手の大關を取外せし事なき大力の早業、身材は六尺に近く體量は二十五貫を越え、加之も父母なく兄弟なく妻子なく物の分別さへ聊か足らぬ勝の獨身者、おのれが身の現在呵責の獄卒に使はるゝとは思はず、たゞ滿身の力の及ぶかぎりの活殺自在、抛け殺しても仔細なしと許さるゝや否、頸骨を据ゑ肩骨を怒らせ四肢を踏み鳴

らして喜びぬ、名は勘治平、年は三十二、折しも今日の番組を受持の役僧、こゝに顔色を失うて駆け込みながら、明王院の宥観小僧いづれにか去つて影なし、さア遁けた遁けたと狼狽眼の大聲を振り立て、叫び廻りぬ、

さては明王院の住職宥晃の業、かくまで重き一山汚辱の罪を思はず、おめく師弟肉身の輕き愛に換へて、わざと取遁せしに極つたり、この上は免れぬ縁の同罪ながら、流石に古き一寺の老僧、たゞそのまゝ袈裟を奪ひ法衣を剥いで山を追ひ下すべし、さなくば今日の明神に法樂供養の甲斐なしと騒ぎ出しぬ、

たま／＼この明王院に來りて一夜の宿を假りしは、古昔、野山全體の行學に反して邪道異説の大敵と罵られながら、八祖傳來瀉瓶一味の本宗より別に新義眞言の正宗を起せし覺鑊上人の創立、その根來寺の法水に流れを汲める頼覺房とて今年四十八の大坊主、かくと聞くや否、勃然として夜叉の如くに起き上りぬ、

「宥観小僧の糞始末も宥晃房の後始末も斯くいふ根來の頼覺が引受けたぞ、長十丈の鬼たりとも我法力を以て組めば何のその、さるを凡下凡俗の匹夫野郎、相撲の敵手とは事も呵しや、片手搦みに搦み殺してくれろぞッ」

一山に臭氣を放ちし糞騷動の本人、その宥観小僧が俄に山を遁け伸びて、免れぬ縁に残りし明王院の住職宥晃を寺門より追ひ拂はんとすれば、をりしも一人こゝに宿りし他山の大方主ありて、みづから師弟の罪を荷ひつゝ、進み出でて最勝會の明神相撲を引受けんと叫ぶ、加之も其の大方主を根來の頼覺と聞きし野山の總院、おもはず法衣の袖を捲き上げながら拳を握り眼を怒らし大地を踏み鳴らして猛り立ちぬ、そもく大師入定の數百年後、堀河朝の嘉保二年、肥前の一寒村に生れたる小兒八歳の時、その父が村長の前に蟲の如く拜伏せしを怪み、これを問へば村長は父よりも尊

く郡主は村長よりも尊く國司は郡主よりも更に尊く、また國司の上に遠く一天萬乘の天子あれども得て望むべからず、たゞ人間を遙に去りし無上の最尊最貴なるものに神明佛陀ありと聞くや否、この小兒こゝに猛然として自己その神明佛陀たらん事を誓ひ、十歳の孤影に家を飛び出し、諸國の艱難流浪に諸山の明師を叩き、十八歳にして高野山に入りしが、天生の志望、修得の行學、ともに異彩を放ちて一山を空しうせしのみか、高祖廟前に求聞持の法を成就して大智大識の曉、始めて野山の末世末法は祖師の行徳に反するを歎き、喝破一聲、これを改革せんとせしが忽ち頑冥固陋の衆徒に嫉まれて一山の攻撃に逢ひ、果は闇夜の白刃に刺されんとせしこと幾度、寢る時は穴居して甲冑を纏ひ讀經の時は蟠居して長刀を携へしも衆寡こゝに敵せず、わづかに流血淋漓の身を遁れて都に馳せ上るや、百獸を顧みる獅子の奮勵一番、別に新義眞言の一派を天下に叫んで朝野を動かし、竟に勅許を賜はり院宣を得て大小の傳法院を創設し、

果は同じ紀州の國中に根來の一山を開いて後奈良の朝に興教大師の謚を得しもの、これを覺鑿上人といふ、

以來こゝに源泉一滴の法流を汲みながら、野山の衆徒は根來の新義派を見ること蛇蝎の如く傳へ來りて、殆ど高祖破却の佛敵邪道とせる其の根來の賴覺房が、おもはず飛び出して一山汚辱の罪を犯せし師弟の盾となるのみか、最勝會の法樂相撲を一呑みに呑んで傍若無人の大言、名倉村の勘治平とは何物の凡下ぞ、長十丈の鬼なりとも我法力の金剛に掴み殺さんと叫びしかば、一山は忽ち鼎の湧くが如し、

十六の小僧が三日放溜の大糞を竹筒より押し出して千年の靈場を汚せし事も、一寺の住職たる六十一の老僧が泡沫に等しき現世子弟の愛を以て永劫不滅の罪を遁せし事も、今は詮議の違さへなく、只この根來の賴覺房が頭上に一山の悲憤を注いで、もし相撲の手に餘らば惡魔降伏の劍を揮つて膾にせよとの猛勢、あのみ、生けて再び當山

を下すべからずとの評定一決、いよく二日興行の今日を見遁して翌日の日中を相圖に其最後を見届けんとぞ取極めぬ、

加之も當山の正傳を破りし覺鑿の末流、根來の佛敵と知りし上は、高野山上いづれの寺門にも今夜の宿を貸すべからず、また遁け出すべき新道舊道の出口に番を据る置き、終夜の雨露に打たせて其まゝ立往生さすべしと觸れ廻れば、賴覺房からくと大口あいて高く笑ひぬ、

「一山の總院、この賴覺に一夜の宿を貸さぬとて固より樹下石上を旨とせる塵外の身に何の癡言、されど根來より來つて眠るべき坐もなく高野の雨露に立往生せしとあつては末代こゝに面白からず、幸ひ我祖道の興教大師が嫉妬偏執の白刃に圍まれ給ひし時、傍らなる不動尊の石像に傷つきしまゝ、双影の端だに御身に及ばず、今なほ記念に残る覺鑿が血止の不動阪、これぞ我ための七堂伽藍、その尊像の下に一夜を

通夜しまるるぞ」

唵るが如く教ふる如く説くが如くに語りながら、女人堂に近き不動阪の邊、世に聞えし高野山上の一名所、覺鑊が血止の石像へ悠々と歩み行きぬ、

高祖大師が入定の奥の院、小田原町を過ぎて一の橋と二の橋を越え、世に御廟橋といふ三の橋の前、その傍らに依然たる覺鑊堂はあれど、一山こゝに憤怒の腕を組んで廟前に近づくを許さねば、悠々と踵を返して女人堂を下りつゝ、いはゆる覺鑊が血止の石像を拜跪しながら、この曉には總院の衆徒に自己また生命を規はるゝ根來の頼覺房、その不動阪の不動堂に入りて常住三昧の一夜を過しぬ、
聞として耳に鳴り響く萬籟無聲、寂として身に沁み渡る夜氣陰々、一點の燈影なき山腹の草堂に端坐しながら、靜に扉を押開きつゝ、闇夜の明星を誘ひ入れて透し仰げば、

只これ有るが如く無きが如く、闇中ほつとして形は臙の眼に映せざれど、平生の心念に描ける不動不驚の大威怒明王、ありくくと我を見下し給ひぬ、

頭に戴く八葉の蓮華、面に現はす青點の憤怒、熾盛炎々たる迦樓羅の焰を負ひつゝ、右に惡魔降伏の智劍を捧げ、左に大悲大德の絹索を持し、金剛盤石に坐して無邊に現出せる法身、生けるが如し

頼覺房、その前に兩眼を閉ぢて一念不亂の祈誓を籠めぬ、

「金剛智能斷、金剛定能薄、所求一切事、隨時得成就、こゝに頼覺が肉身の滅却を恐るゝにあらず、また當山の衆徒を碎破せんとするにあらず、たゞ斯の如き末法虛偽の徒輩を幸ひ、今この時に當つて現實に度し去らんとするの念願、あはれ暫時この頼覺に斷壞一切衆魔の法力を降し給へ、如上殊勝功德、金剛手菩薩」
一念こゝに注いで祈れば、忽ち頭上より不動明王の聲あり、

「この馬鹿野郎ッ」

頼覺、むくりと頭を振り上げて闇にも輝く兩眼、くわツと見開くや否、鐵の板をも蹴破るべき猛威に進み寄りぬ、

「道心堅固の頼覺に狐狸の業あるべき筈なし、念願の通力に依ッて我に利益ありとも木像に言葉あるべき筈なし、何物ぞ、いざ出い」

聲に應じて闇中の一物、ごそくと不動明王の背後より這ひ出でし體、頼覺さらに驚かず、拳をあげて透し窺へば、その拳の下に答へて曰ふ、

「師の恩に反いて、まだ山を降らぬ明王院の宥観小僧」

不動阪の不動堂に通夜念願の頭上より、大喝一聲、この馬鹿野郎と叫んで這ひ出したる闇中の一物を何奴と思へば、はや既に山を落ち伸びし筈の宥観小僧と聞くと、高

野一山を敵として驚かぬ根來の頼覺房も流石に案外の心地しながら、星明を引き入れし堂の扉を閉ぢつ、聲を潜めぬ、

「何として山を降らざりしぞ」

「二山の衆徒この宥観を取遁せし後、いかに師の坊への振舞あるか、それ確と見届けんがため」

「や、人知れず遁すも留まるも師弟の間さる事ながら、現在その師弟の盾となりし此、この頼覺を感想同宿の友と思はず、たゞ卑しき俗界の一言を喝して馬鹿野郎とは」

「おのれが罪を老いたる師に残して其まゝ山を落ち伸びし小僧と見られし事、いかにも無念、これに報いし一言、されほごの心耳に觸れましたやら」

「や、それもよし、解したぞ、さらば師の坊の成行、もし一山の瞋痴に纏はれて身の定座を失へば何とする」

「もはや師の情に反くとも師の禍を見るに忍びず、幸ひ二日の最勝會まだ一日を餘せば、このまゝ土俵に飛び出して、首骨、胴骨、腰骨、手足、宥觀の五體いづれなりとも敵手の望むところを挫かせて師恩の犠牲に供へまする」

「師を全うし身を碎いて後、出家方便を去り在家正道に就く心か」

「いや、肉身の一端に生命さへあらば、たとひ不具になるとも金翅鳥が諸の毒惡を噉ふが如く、眼前に火生三昧を起して、この一山は火となりまする」

この小僧、そもく何物の化身ぞ、糞を以て千年の靈場を汚せしのみか、火を以て一山の坊舎を焼き拂はんとの言葉に、頼覺、おもはず梟に似たる目を闇に光らしながら、あな怖ろしやと容を更めぬ、

「法は廣大無邊、山は永却不滅、坊舎また佛陀の給仕供養を存するところ、これを焼いて何の智力となるべき、まして其うちに免れ難き恩師の老體あるを忘れたか、や

れ危し、危し、たましくこゝに頼覺が來つて自然の盾となるは正しく高祖大師の示現、宥觀を助けて相撲の敵手を抛けよとの事ぞ、その敵手にさへ勝たば師の坊に恙なく、其身に念なく、一山の衆徒も瞋恚の執着を宿すべき影なし、たゞ其まゝに満虚空中の如く現はれて出でよ、いかなる敵とも組んで勝負を決せよ、一念を金剛に注いで掴み挫けよ、この頼覺が縛魔の法力を添へて後見するぞ、爾時金剛手三昧起告、南無や不動不驚、はや空は東天に近いぞ、衆徒に驅り出されんより、如是こゝに打連れて壇上以待たう」

獅子の如き頼覺、猛虎の如き宥觀、大小の坊主頭を曉の明星に照らしながら、まだ脚下うす闇き草堂より衣の袖を連ねて、のそりと立出でぬ、

他山も他山に依りけり、そもく當山の腹より生れ出でて法敵となりし覺鏝の末流、

その根來に名を得たる頼覺と聞きし上は、もはや明王院の師弟詮議に及ばず、たゞその蛇蝎を踏み殺せとて、一山の衆徒は狂氣の體に騒ぎ立てぬ、
されば高野明神へ法樂供養の最勝會も、きのふ一日の相撲は兒戲に等しく、けふ一日の勝負は戰場に等し、

三日以前より呼び上されて坊舎に宿れる在家の大力無雙、かの名倉村の勘治平は五體の筋骨を揉み出して生仁王の如く、わけて今朝は満山の衆徒に取囃されながら、鐵鉢の如き大茶碗に酒を注いで飲むこと三升、朝ほらけの空に六尺の渾身より紛々たる酒氣を仰ぎ吹きつ、盤石も踏み抜く猛勢、大地に轟く力足を踏み占めぬ、

「お山の影に育った御寺領内の身ぢや、年々の最勝會に片屋入の大關を取つて占めても儲、持った力の十分一、なるべく相手の衆に怪我の無いやう、そつと宙に受けて柔かう組んだが、御坊達、今日こそは會釋も用捨も手加減も無い總身の力業、この

勘治平が生れて三十二の曉、始めての面白い相撲を見せませるぞ、わけて十六の新發意と思ひの外、ここから来たか、やれ氣の毒なこと、不意に飛入の大入道、首叩きと外掛の得手を出すまでも無い、鼻と鼻との真正面に向へば最後、敵手の皮も骨も肉も前餅菓子ぢや、もし飛び違へて手先が觸れば其ま、搔い擱んで、は、は、は、手鞠ぢや、引き付けて組めば芋設ぢや、は、は、は、は、

啞く喚く猛る嘲る、満腹便々の酒氣を虹の如く吐いて、小山の動き出すに似たる體、衆徒いづれも雀躍の手を拍ちながら、人垣に取巻いて坊舎の門を押し出しぬ、
曉けなば現在この大敵に擱まるべき露の生命を、やうく不動阪の一夜に宿せし頼覺、そもく今朝いかなる顔色やある、取組の時刻に早けれぎ、まづ引き摺り出して荒膽を挫けと、氣早の衆徒七八人、一散の脛を揃へながら壇上を横ぎらんとすれば、明神の附近なる杉の樹蔭より、大喝一聲、

「頼覺こゝにあるぞッ」

はッと驚いて見返れば、頼覺のみか、既に山を落ち伸びし筈の宥観小僧もろとも大杉の根方に腰うちかけて満面の微笑を含みながら、小手を連ねて差招きぬ、

「この曉方より骨が鳴り肉が動いて待ち受けた、やれ待ち草臥れた、鬼か人か何物にせよ敵手の用意さへあらば、何時なりとも時を嫌はぬぞ」

宥観小僧また矜迦羅童子の如く、加之も高く大口あいて笑ひぬ、

「糞で一山を動かした宥観、今日の相撲は屁で放り飛ばすぞ、はッはッはッ」

飛んで火に入る根來の頼覺たゞ一人と思ひの外、ごこの葉蔭に今まで潜みしやら、はや既に山を落ち伸びし筈の宥観小僧まで顯はれて、明神の大杉より小手を揃へつ、呼び止めしと聞くや否、一山の坊主頭いよく血に湧き立ちぬ、

二日の最勝會、残る今日一日を過しては袋の鼠を取遁すに似たり、さらば一切の相撲を止めて直ちに彼奴等二人を明神の供物に捧げんと、そのまゝ人浪を打って壇上の土俵に押し寄せつ、引出されし頼覺房と宥観小僧、互に父子の如く打連れながら悠々と西の埒に入り來りて差控へし面魂、いかなる降魔の金剛杵を頼みけん、一山の敵を呑んで満面の微笑、

東の埒には名倉村の勘治平、雲霞の如き衆徒の勢ひに嘸し立てられて、生涯こゝに一度の晴業、六尺の身を動き出しながら、肩を怒らし肱を張り胸板を突き出しつ、じろりと前面を見渡せば、あはれ引汐に取残されたる濱邊の藻屑に等しく、たれ一人の味方も介添も拾ひ手もなく、ひっそりとせし中央に古入道と新發意とたゞ二人、

「やれ一人で済む筈を二人まで、殺生、殺生、たゞ苦痛の無いやうに占めてくれるがせめての功德ぢや、やツと立向ふを相圖に五體の飛び散る方角へ目を付けて、いづ

れも念佛々々」

からく高く笑うて衣類を脱ぎ捨て、黒土の荒細工に捻り上げたる如き身を運び、行司の聲も待たず力水を一口、のそくと土俵に上りて四方を見廻しながら、仁王立の勢ひ大地に根を持つが如し、

かくと見て取りし頼覺坊、衣の袖を背後に跳ね退けて下衣の白衣を巻き上げつゝ、四十八年の行學を積んで修め來りし眼中に一種の光輝を放ち、念力満々の額越に遙に虚空を睨みながら、ぬツと立ちぬ、

「執持猛利劍、一斷無餘習、執持金羅索、一溥無能動、凡俗匹夫の力は枯れたる秋の木葉に等し、何物の障礙かある、頼覺こゝに如影隨形護」

それ起てと叫べば、宥觀小僧、丸裸となつて蝗の如く土俵の上に飛び出しぬ、かくと聞き及びし明王院の住職、師の坊の宥晃は老の兩眼に涙を浮べながら、一室に

閉ぢ籠りて死せるが如き念佛三昧、

それに引換へて眼前かくと見る一山の衆徒は東の埒に溢れて四岳八峰も踏み破る勢ひ、狂氣の如く叫びながら、平生の讀經に馴れたる閑の聲、

西の埒には頼覺たゞ一人、もの凄く輝ける眼中に瞬きもせず打守りて、彼もし土俵の砂に埋もれたらん時は、我また野山の骨となつて再び根來に還らじと、満身の太息を含んで無言寂寞、

土俵の上には籠七里四方に聞えたる六尺大力の勘治平と、今年やうく十六の新發意たる宥觀小僧、大小黑白、おのく互に狗居となつて覘ひぬ、

東の埒には閑の聲をあけて一山の衆徒幾千人、西の埒には孤影無言のまゝ、根來の頼覺たゞ一人、土俵の上には生ける仁王の如き名倉の勘治平と矜迦羅童子の化身に等しき

宥観小僧と、互に相向うて斃すか斃さるゝか、活殺生滅の一刹那、勘治平は狗居となりつゝ、右の力腕を下して左を自己が脇腹に控へながら、猛獸の小鳥を覘ふが如き體、じろりと額越に見れば宥観小僧、兩の拳を打揃へて前に突き出しながら、肩と肩との間に首を締めつゝ、差俯きし口のうち、南無阿彌陀佛、さては小僧、逆も免れぬ生命の瀬戸際と知つて、おもはず漏れし念佛の聲、あはれ笑止や観念せしかと、頭上より冷かなる微笑を浴せて差覗くが如く面を突き出せば、何ぞ圖らん、これぞ敵の最後を弔ふ一片の回向、やツと叫ぶや否、その差覗きし眼中へ兩手の砂を搔き上げて、はツと立ちながら反身になりし間一髪を金剛の念力、自己が頭腦を碎くか首骨を折るか、電光石火の勢ひに敵の陰囊を覘つて突き上げしかば、音に聞えし流石の大力無雙も不意を打たれし急所一點の早業に堪らず、暫時は其まゝ、片足に六尺の満身を支へて病める猛牛に等しく唸りしが、忽ち五體を大地に吸はるゝ如

く、挫と響いて打ち倒れぬ、あツと呆れて開きしまゝの目と口ばかり、聲さへ出でぬ一山衆徒の中より血氣の荒坊主七八人、衣の袖を襟首に結んで土俵の上に躍り出せば、頼覺坊、西の埒より飛び込んで宥観小僧を背後に圍ひながら、兩の大手を擴げて鬼神も蹴破るべき憤怒の形相を現はしぬ、加之も一期の大音聲、
「や、御房達、何とせらるゝ、たとひ千年の清淨を汚せし罪ありとも道心いまだ彼岸に達せぬ十六の新發意、たゞ一朝の戲事に生涯の五體を捨て、悔ゆればこそ、既に遁れし身を再び自縛の當山に立戻つて、九死一生を得難き今日の相撲に出でし上は、もはや高祖大師の無量慈悲海に浴し明神法樂の無邊供養に叶うたる筈のもの、されど只これ肉眼の外に心眼なき御房達を説破センがため、兩々相對して勝敗こそ、に定まる現在の今、そもや何の怪しむところあつて暴惡の相を並べらるゝぞ、覺鑊

の末流、新義真言の古入道、根來の頼覺それ承はるまでは御房達、この土俵を降さぬ、もし相撲に興が足らば幸ひの番組、このまゝ此處に衣を脱いで其七八人、いちく引受けるぞ、まるらうか、まるらるゝか、什麼」

満目の敵中に一介の肉身を恃て、俱利迦羅龍王の喝するが如き猛威に、一時の血氣坊主おもはず顔色を失うて土俵を遁け降れば、頼覺なほ立てるまゝ、靜に首を捻りつ、宥観小僧を振り返りぬ、

「一山の的に取られた用は濟んだぞ、高祖の廟と明神の社前へ御暇乞して、いざ諸共に山を下らう」

女人堂より神谷を打過ぎ神根井を降りて高野山の麓、紀の川の邊、學文路宿の旅籠屋に今夜の宿を求めつゝ、かけ離れたる奥の一室に漏るゝ燈火の窓を閉ぢながら、頼覺

房と宥観小僧、

「父に等しい師の坊へも後の煩累を残さず、また一山を汚した罪にも行はれず、あの敵に對うて不思議の勝を得ましたも、如是功德、偏に金剛の法力を添へられた御房の加護と心得まする」

「や、皆これ其の身その我を忘れて自然の大通力を得た一念の業ぢや、さも無くて叶ふ筈のない六尺の大男に、やうく童形を脱した十六の骨身、もし他より添うた法力ありとせば、もはや高祖大師に罪を許されて明王の加護を垂れ給うた現實ぞ、同じ骨身の古ほけた頼覺が何の、何の、はゝゝゝ、偕まつ無事に三里の山を此、この麓まで下ツたが、これからの浮世といふ、雨風の激しい俗界へ下るには始めての旅路、いづれの方角へ向いて行かるゝ氣ぢや、こゝと定めた心當りの所縁ばし身に持たるゝかな」

「は、一切無縁、ごことも定めず、只その雨と風とに此身を任せまして」

「事の起因は儲置き、兎にも角にも新發智の身を以て千古傳來の一山を敵に取つたは尋常の器に盛れぬ業、されば初步の浮世にせよ、そのまゝの雨風に打たれて朽ちも果てまい、なれど川を渡るに舟、山阪を越えて杖草鞋、また世を過すには身の知邊、聊か案内いたさう」

「法縁か俗縁か、たゞ師の坊へ三日お宿せしばかりが、かくまで深い御恩の袖に包まれてまして」

「いや、包むほごの廣い袖も持たぬが、この衣の端に高田左門といふ兄あつて小祿ながら江戸の空で槍一筋の男、これを尋ねて武家にならずとも、儲また何かの便利にならうぞ」

「や、さては御房も、東國の武士種で在らせらるゝか」

「いかにも、今いふ通り兄の弟、在俗ならば馬鞍に跨がるべき身を、仔細あつて京の宮家に仕へし縁者の許に貰はれ、その家また仔細あつて退轉の砌、智積院の新發意となり、十五年前、本山の根來に來つて一寺の住職になつた賴覺房、生れし時の名は高田祐之進、はゝゝゝ不意に呼ばれては耳にも付くまい、我ながら今は他人の名を聞く心地」

「この宥觀また東國武士某一子といふ、たゞ七字を父の記念に二歳の春、この學無路宿へ捨てられましたを、あの明王院の師の坊に拾はれましたる身」

「むゝいはゞ自然の俗縁あつて、生れ故郷の空へ歸る身ぢや」

「されど南無、この一夜が佛縁に離れて、曉けなば塵の浮世いかなる身の末を取りますやら、せめて最後の念佛、十六の今日まで法身を保ちました山上に向うて通夜の讀經」

「それ善哉、末法の衆徒に對する一時の方便ながら、賴覺また祖師の靈地に恐れあり、
通夜の共念佛、共念佛」

たとひ山を迫はれて去るも、たとひ山を蹴つて去るも、十六の今日まで法身を保たれし祖師の靈跡、麓の露と消え果つべき運命を拾はれし恩師の在すところ、うけし血は東國の種なれど育ちし身は當山の外に浮世を知らぬ宥觀、今や住み馴れし懐かしの空を離れて東の旅路に立つと思へば、天生不敵の心にも何とやら名残り惜しく、終夜山上に向うて讀經念佛の曉、はや東天を告げ渡る鴉の聲に残んの燈火を吹き消して、兩眼に涙、ほろりと落しぬ、

その傍らに伴うて通夜せし賴覺房、また道心堅固の古入道ながら、この曉の一點の佛縁と俗縁の境目、その間に我身を置いて眼前この宥觀を送り出すかと思へば、ふし

ぎや肉身に別る、心地、靜に衣の袖を搔き合せて振り返りぬ、

「もはや曉けたぞ、佛界の最終ぢや、俗界の首途ぢや」

「は、ごこまでも盡きぬ御恩の袖ながら、これにて別れまする」

「いや、せめて紀の川の彼方、紀見峠の此方、橋本の宿まで送らうぞ」

「遙の旅路、こゝも橋本も同じ事に無益の御苦勞、このまゝ、たゞ此まゝに、御暇を申し受けまする」

「遙の旅なればこそ、一步たりとも送る心ぢや」

「は」

「たゞ遣るが惜しく乃至また其、その器を浮世に捨つるが惜しくば、根來へ伴ひ歸つて、しみんと心の濟むまで、二月三月の足を止めるか、但しは更めて我新義の法界に包み終る念願の工夫もあるぞよ」

「は」

「されど、いづれ行くべき空と、思ふての事、この頼覺に初草鞋を送られて、潔く行け、終生また逢ふやら逢はぬやら、有無轉變の世の中ぢや」

高野一山の靈場に古今あるまじき糞騷動を起せし悪戯者ながら、いかなる刹那の感想に打たれしか、今この頼覺坊が一言に、腸を絞られつゝ、無言の頭上に禮拜の両手を高く捧げぬ、

居座を定めて住み馴れし後は心の働きに得べき業もあれど、まづ浮世の旅に無くて叶はぬものは斯物なりと、頼覺その身の持ち合せし財布の底を叩いて江戸の兄の元へ頼の書状もろとも宥観の肌に着けさせ、學文路の宿を立出でながら、紀の川を渡りて橋本の町外れ、往來の歩を呼び込む森影の葎簀茶屋に腰うちかけし時、ふと振り返りて何心なく見れば、その茶屋の奥より半面そつと現はせしは最勝會の相撲に急所を打た

れて氣絶せし名倉の勘治平、

高野山の麓は三里の阪を降りて學文路宿、法界の寺領は紀の川の岸邊、その流水を渡りて橋本まで立出づれば、もはや敵地の境を脱せしと思ひの外、心を許せし葎簀茶屋の物影に名倉の勘治平、ちらと半面を現はすや否、頼覺房、おもはず床几の腰力を据ゑて宥観の耳に口、眞如の月影に住むべき身を以て婦女の嫉妬に等しき衆徒執着の業か、但しは度し難き凡俗の匹夫め、おのれの迷ひの餘念に驅られて最勝會の仇を報いんとてか、よし現在いづれにせよ前途の道を立塞ぐ障礙物、手を出さば縛魔の金剛ありと、懷中より五智の鐵に鍛えたる守護の五銚を取出して右手に握りながら、靜に衣の袖を卷きつゝ見返れば、宥観また不敵の右手に脚下に突れる切石そつと拾ひあげぬ、

「清淨の臺に身を置いて圓滿無垢の心を保つべき佛徒さへ、末世の今は野狐の衣を

纏ひし體ぢや、されば猶更ら以て煩惱の塵深い浮世の旅に用心專一、ごこの穴かに何物の狼狽へ出ようも知れぬ、わけて首途が大事、この橋本で別る、筈ながら、幸ひ河州の三日市に所用あり、また泉州の堺へも、行かて叶はぬ所用を思ひ出した、は、は、ゆるく送らうぞ」

いざとて宥観を促しつゝ、もろともに葎簀茶屋を立出でて橋本の町を打過ぎ、東家村を越えて紀見峠の麓に差かゝりし頃、いづこの間道を走せ廻りしか、背後より影を潜めて追ひ來るべき筈の勘治平、ぬツと路傍の藪疊より飛び出して前に立塞がりぬ、加之も細き阪路に猶更ら見上ぐるばかりの大男、おのれが血氣の大力に頼んで毛胸を現はしつゝ、仁王立に塞ぎながら、はや山蔭の夕陽に近く四邊に人は無し、四十八の古入道と十六の新發意に冷かなる微笑を浮べて向ひし體、腕も脛も藤蔓を纏ひし松の大木を組み合せたるが如し、

「うまれて三十二の今日まで首に枕を當て、眠る外、起つて土俵の砂に身を横たへた事のない名倉の勘治平、相撲の術に外れた不意の急所なりやこそ大磐石が倒れて生涯一度の不覺を取つたぞ、此面は儲置いて一山への申譯、この小僧は貰ひ受けた」
 頼覺房、は、と笑うて右手に握れる鐵の五鈷を道心の胸壁に構へながら、隼の如く身を捨て、飛び出さんとする宥観を左手に押へつゝ、阪路に溢れて立塞ぎし敵を見る事、ぬしなき破寺の木像に等し、

「こりや匹夫、そこ退け、おのれ元來ぎれほぎの強力を備へても皮一枚に膿血を包んだ人間の肉體、物に當らば紙の如く破るゝぞ、大磐石とは轉ばぬ筈の心念ぢや、疑はしくば眼前この古坊主を手捕にして見よ、は、は、は、さア來い」

夕陽いつしか西の山蔭に傾きつゝ、四邊に人なき紀見峠の登り口、その阪の上より身

も心も行く道に溢れて阿修羅の如く立塞がりしは名倉の勘治平、その阪の下より立竝んで向ひしは古入道の頼覺と新發意の宥觀小僧、もはや生死の運命に間一髪も寸隙も無く、互の血走る眼に睨み合うて驅け寄らんとする折しも、麓より近く聞えし街道馬の鈴の音ちやらく、

頼覺と宥觀、耳に聞けども下より上に向うて見返る違なく、自然の勢ひ上より下に向ひし勘治平の目に入りしは旅の武士一人、馬の脊を飛び降りて兩手を上げつゝ走せ上りながら、大喝一聲、

「味方、味方、味方するぞッ」

流石は事に馴れたる武家の用意周到、待てとも叫ばず止まれとも叫ばず、たゞ味方味方と大聲に呼んで、いづれに味方するかと互の心を引きし一刹那、はや既に走せ付いて飛鳥の如く其中間に飛び入りぬ、

見れば前途の空に遙けき旅装束を整へし二十八九の武士、骨格、面魂、息切もせず顔色も變へず此坂を走せ上つて、加之も生死を争ふ其中間に悠々と平氣の身を落着けし體、浪人か、もし浪人ならば世の中に拗ねたる一癖物、知行を取り損ねて彷徨く男振でなし、主持か、もし主持ならば藩中に唄はるゝ毀譽の巷、おめく殿の御前に扇子を開いて洒色の興を添ふべき男振でなし、

「高野參詣の折から最勝會の相撲を見物したものの、事の起因は問はずとも分つたぞ、そのこの大男め、この御房達を何とする、あの土俵で萬一、おれの無慈悲の暴力に任して新發意の骨身を挫かば、横合より飛び込んで敵手に取らんとした好奇心の見物ぢや、は、は、それが今また此處に來合して、同じ根に咲いた喧嘩の花見とは面白いで、や、御房、お手を下さるゝまでも無い、その新發意を連れて此まゝ通らッしやい、幸ひ山越の徒然に拙者この生命知らずを申し受けたぞ」

腰に横へし兩刀無用の顔色、右手を廣げしまゝ、宙に突き出して勘治平に差向けながら、あまる左手に腰巾着の口紐を解きつゝ、中を搜りて、がちやくくと鳥目を掴み出すや否、懐中の紙に捻つて頼覺と宥觀が立並べる頭上より、それ駄賃を取らずと馬士に投げ與へし體、膽魂みちくして、打てば倒るゝ五體の急所ぎこにあるやら、頼覺おもはず慇懃の腰うち屈め、宥觀もろとも禮拜に等しき會釋

「いづれ斯る事のあらうかと存じて、橋本までの筈を、せめて泉州路まで無事に送り遣はしたく、それがために古入道、は、これは根來の頼覺房と申しまする、また、これなる新發意は今回、さる仔細あつて、已むなく野山を下りましたもの明王院の宥觀と申しまする」

「御念に及ばぬぞ、さゝ早う、拙者これに介添いたす、其奴もし手を出さば取つて抛け捨てるまでの事、たゞ路傍の立木と思つて通らつしやい、峠を越せば三日市の宿

泊でがな在さう、やがて後より訪ひまるらす」

あはれ高野山麓の七里四方に敵なき大力と聞えたる名倉の勘治平、遁け下りもせられず遁け上りもせられず、おもはぬ紀見峠の阪路に立往生となりぬ、

もし不意に擁護の助力なくば、捨身の心を以て暴悪の胸壁を貫くべき一刹那、現在その危きを他に遺して安きを偷み去るにあらねど、眼中に敵なき武士の猛威、あとに萬一の恐れもなき體を見届けしかば、そのまゝ峠を走せ越えて三日市の入口に宿を求めながら、宥觀その門邊に木像の如く立ちつゝ、恩人の影を待ち受けぬ、

はや暮れ果てし宵闇の空に十七日の月、ほつと町外れの麥畑より射し出づる頃、草鞋に道芝の露を踏んで腰に兩刀の面影、宥觀これぞと走せ出でて迎へば果して恩人、
「小僧、お迎ひに出ました」

「や、これは無用の禮儀、痛み入る、御房いづれの宿」

「は、あの旅宿に先刻より頻りと、お待ち受け申して居りまする」

「それは猶更ら以て痛み入る、なれど身勝手はいへば塵外衆との同宿は長の旅にも得難い語り草ぢや、おしかけて夜と共に御談話を承らう、時に拙者、ふと一人の道伴が」

「は、お道伴の方、これへ早速御案内、ごここに在らせまする」

「は、それ、それが案外、異なる道伴で、御房達と懇意のよし、や、何として歩が遅い

ぞ、急げく」

振り返りて月影に差招けば、二間ばかりの此方まで急ぎながら、俄に立停りしまゝ中腰に動かぬ體、宥観、何心なく透し見れば正しく名倉の勘治平、

「不意の道伴この男ぢや、今夜の同宿は一段と面白い筈、は、は、は、」

宥観、はや心に呑み込んで、一轉の言葉、ものゝ音響に應ずるが如し、

「一切斷壞、幸ひ身に怪我も無く去闇就明の御同伴、一入さらに喜んで迎へまする、忍辱の法衣を巻き上げた憎い小僧と思召さず、うちとけて、これへ、これへ」

きくや否、武士おもはず感歎の舌鼓、

「佛界の事は得知らぬが、我等の守る身に取っては風上に据ゑ置くべき天生の潔白、けに青竹を割つた如しぢや、まこと自然に出来た男振、十六の新發意には惜しいもの、惜しいぞく、こりや六尺の五體を無用の沙汰に振舞はした後悔男、これへ出た上あらためて御謝罪せい」

力業に餘りて分別に足らぬ勘治平も、一山衆徒の操り人形に使はれしのみか、嫉妬執着的白刃となりつゝ、峠の阪路へ立塞がりし我身を思へば、今更ら總身に冷汗の心地、照り渡る月に反いて武士の袖影より眞ツ黒の磐大面そろりと現はしぬ、

「名倉の勘治平に、其ま、よう似た此男め、始めて御意を得まする」

雨露霜雪、おの／＼異なれ落ちて流る、谷川の水、忿怒の峰に上りつめたる人の怨

恨も解けて下りし麓の末は野原、敵も味方も無し、

國も境、心も境、月に見上ぐる紀見峠を隔て、一切の執着を打忘れつ、三日市の宿

に終夜の物語、頼覺と宥観と名倉の勘治平、その三人を友として十年知己の如くに談

笑する武士の素性を聞けば、ふしぎや同じ身の居坐を追はれて東の空に向ふ旅、

「南龍公以來、物頭の家を生れし紀州家の藩中、しかも代々同一の名を傳へて大泉周

左衛門といへば聊か人にも知らる、ものながら、この身が七歳の時、父は同役の某

と口論の末、引くに引かれぬ武門の意氣地に果し合ひ、互に相打の相死となりしが

相手は時めく御部屋方の紅粉に所縁あつて知行そのま、一子に譲られ、我は千五百

石の三分一、それさへ此身の二十五歳になるまで召上げられ、親類後見の日影に百

石の放し飼、されどよし、その二十五歳の曉はと文武に身を碎いた甲斐も無う、

やう／＼約束の歳に召出されたは同じ百石、まして不具も勤まるべき太平の世の御

寶藏番、や、下さらすば改めて一粒も下されぬが却つて武士の面目、もし賜はらば大

國の君より正しく仰せ出された御一言、相手方の幸運も妬まぬ、父が御馬前外の死

を遂げた千石分を差引、あと御約束の三分一その五百石は必ず戴くべき筈の身、さ

れど百石この一身を養ふに足ると思へば、知行の多少増減に依つて相傳の君を斜め

に見ること廉恥ある男の本意ならずと心得、ことし二十八の曉まで三年の間、耳と

目と口を塞いで啞の如く盲目の如く聾のやうに勤めて来たものぢや、は、は、は、は、

れど其、その百石すら、なほ過分と私語き無用の捨米といふ奴がある、は、は、呵し

い人心ぢや、折柄、君が祕藏の愛犬、いはゆる士に菜色あつて犬の肉は肥えたり、

その犬め近來、ふと狂病の牙を鳴らして諸士の脛に噛み付き、これがため傷ついたものが今日も三人、今日も七人、また今日も十人、中には足輕の小娘その狂犬に一命を取られながら、誰あつて訴へ出るものなく、いづれも恐れて御犬様に媚び諂ひ、麻上下の凜々しい武士の袂に賄賂の魚肉鳥肉を忍ばせるといふ體、なるほご此の大泉周左衛門に百石の知行は惜しい筈ぢや、一日の夕暮、三の丸の枳形内を通行の砌、ぱつと不意に飛び來つたのが此犬、身を開いて襟首を搔い攪むや否、宙に抛け上げて落ち來る下より拔打の一刀、斬れたぞ、又は高木貞宗二尺六寸、胴を兩斷にして災禍の根を絶つた翌朝、あらう事か、現在この犬の齒痕を向脛に残した腰抜共が音頭取となつてこの大泉周左衛門へ申し渡されの儀は切腹のところ格別の御慈悲に追放ぢや、はッはッはッ結局の僥倖、和歌山の城下を立退いて、再び還らぬ故國の名跡靈場、高野山へ參詣の朝が最勝會の相撲、見れば六尺の大男が一山の衆徒

に噓し立てられ、その十六の新發意が唯一人の御房に後見され、勝負の後の爭論に始めて事の大概を知つたのみか、また峠の急場に出會うて今かうなつた始末ぢや、は、は、は、」
敵を眼前に置きし間一髪の危急にさへ、腰巾着の鳥目を探つて馬士に投げ與へし男、今また涙の種となるべき不運の我素性を語りながら、なほ平然として幾度か天井を仰ぎつゝ大聲に打笑ひぬ、

糞を垂れて高野山を追ひ出されし明王院の宥觀小僧と、犬を斬つて紀州藩を追ひ出されし大泉周左衛門もろともに、前途は同じ東の空、加之も周左衛門は最勝會の相撲を見てより塵外の僧形には惜しき新發意と思ひ、宥觀また紀見峠の難を救はれしより天晴の武夫、かゝる人を友にせばやと思ひ込み、いはず語らず互に思ひ合ひし身が今こ

ここに胸うちあけて兄弟の如く、さらば幸ひ相携へて旅の道伴、ふしぎの縁に浮世の果まで伴ひ行かんとぞ約しぬ、かくと聞けば猶更ら根來の頼覺房も同じ情の露、衣の袖に餘りて我子を託する心地、偏に行末を頼みつゝ見返れば、此方の片隅に名倉の勘治平、悄然と化け損ねたる狸に等しく、目を瞬いて六尺の身體を縮めながら、今は包むに堪へ兼ねて泣くが如く訴ふるが如し、

「最勝會の相撲と紀見峠の白癡さ、それを差引かれましては逆も無事に五體ない筈の勘治平、たゞ名と面だけが似た奴と思召して、もはや曲けた心の眞直に立直った下郎一人、道中お荷物と擔ひ、山阪お草鞋の紐を結びながら東への御供、叶ひますまいか、實は名倉へ歸りましても親なし妻子なし獨身者、わけて牛小屋に等しい他人の片廂で其日々々々を水香百姓の身、たゞ年々の最勝會へ聊かの興を添へるだけに持

った男、それが今年の土俵に丸潰れの上、かうなるべき物の道理ながら、また紀見峠も仕損じましては、生涯お山の衆に睨まれ土地の者に笑はれて二度と用なき白癡力量の持ち腐れ、踏まれたまゝの田の草と共に朽ち果てまする奴、同じ踏まるゝならば聞き及ぶ日本一の大江戸、その中央で、ごういふ音のするものか、みごと踏み殺されたいが念願で御坐りまする」

身材は六尺の大兵、とる年は三十二の男なれど、野に生れしまゝの天性、踏み迷ひし横道を悔いて心の本道へ立歸れば、たゞ見る小兒の如き可愛さに、大泉周左衛門おもはず微笑を浮べて首肯きぬ、

「田の草と共に踏まれて朽ち果てるよりは、同じ踏まるゝ身を聞き及ぶ日本一の大江戸に踏まれたいと面白、その一言いかにも面白いぞ、念力の早業に急所を突かれて倒れ、またこの周左衛門にこそ手鞠の如く取られたが、世間たゞの奴に向うて

は勝れた剛ぢや、第一、おのれの恥を知ッて生れ故郷へ歸らず、いはゞ兜を脱いで
 今まで敵と覘うた我等の草履まで擱まうとは、學ばずとも自然の善惡に差別の早い
 男、びらりしやらり、當世風の華奢に流れて、小唄に耽る腰拔武士よりも萬々の上
 乗、や、快く承知したぞ、引受けたぞ、法界の山を追はれた還俗坊と、相傳の君
 に追はれた素浪人と、故郷の土に見放された水呑百姓と、以上三人の東下りぢや、
 ざんざめく花の大江戸で浮世を假の男世帯も一興、はゝゝゝいかに思はるゝ根來の
 御房」

頼覺おもはず笑を傾けて、引かるゝにあらねど何とやら羨ましき體、
 「あゝ扱も面白けの行末、若い人々は男一代するだけの事せらるゝが浮世ぢや、はゝ
 はゝゝゝ」

前夜あれほぎ冴えし月影も、窓うつ夜半の小雨に閉ぢられながら、今朝また思ひの外
 に晴れ渡る旭日影、いとゞ青葉の色添ふ紀見峠の翠を染めて、街道の露に夢を殘せし
 草鞋の痕を見れば、はや心せはしく立出でし旅人の姿、高野參詣の友を呼び交ふ聲々、
 小唄に合して荷馬を追ひ來る鈴の音、いづこも同じ假寢の空なり、
 折しも三日市の宿より出でし町外れの小松原、六道能化の地藏菩薩が路傍に立たせ給
 ふ石像の前につきぬ、名殘の四人が袖袂、前夜の雨よりも今朝の露よりも何とやら濕
 り勝なり、
 ふしぎの縁の柱に立ちて大泉周左衛門は誰が目にも寸隙なく凜々しき旅の武家装束、
 宥観は青々とせし坊主頭の黒くなるまでは道中そのまゝの新發意、勘治平は一文字笠
 に布子の袷着を高く引上げて紺の脚絆に跣足の草鞋、ぬツと六尺の身を峙てながら一
 人の背後に隨從ふ體、遙けき旅の空を守る譜代の忠僕めいたり、

この三人に對うて枯木の如く立てるは賴覺房、行學道心ともに今年四十八の古入道ながら、今ぞ浮世と塵外との別離、きのふ今日の淺き交際なれど深き契りの情は骨肉に等しき心地、しかも現在こゝに相見る互の顔貌、このまゝ變らぬ人の身でなし、さらに末を思へば流るゝ水の泡沫に似たる生滅無常いよく果敢なし、

「突如の所縁かくなりしは、よくく前世よりの因を引ける果と存すれば、その新發意の事、還俗の後は猶更、わけて兒品の大泉殿へ頼みまらさず、また勘治平も一朝翻心の新なる善人、行末長く御恩に預かるやう、偏に頼みまらさず、遠き東の空と南の果、加之も浮世の在家と山間の法界、いづれ音信も自然に疎うなり勝の事、ただ蔭ながら御無事を祈りまするぞ」

わざくまた宥觀の手を取つて、その顔を今更の目にしみてと打守りながら、さも思ひ入りし體、

「根來の賴覺、もはや五十の阪に二年、また逢ふやら逢はぬやら、今この別離に臨んでの一言、よく身に受けられよ、其身そのまゝの佛徒たらば、一山の法燈を嗣ぐべき大智識となるか一山の教界を破るべき大惡魔となるか、恐るべき道心の轉化物また其まゝ俗世の巷に交はれば順に従うて仁義者の名を得るか但しは逆に一遡つて古今不敵の奸毒者となるか、いづれの道にもせよ音なく聲なく尋常の器で濟まざる天生、猶更ら以て平生の謹慎專一、願はくは鋭き心の角を多年の精魂に磨ぎ丸めて清く圓かに平かなる境涯を守られよ、ゆめ忘れても以後一切、おのれの活氣に任して物を破らぬやう、只管念じ入る、根來坊中の破邪劍とて荒法師の如く人に知らるる此賴覺すら、行末の恐れを抱いて斯くまでの一言ぞ」

宥觀、握られしまゝの手を押し戴いて、兩眼の涙に頬を傳はせ、立ちながら無言の身を打俯しぬ、

いつまで惜しむとも、いづれ別る、袖の露、さらば、さらば、東の空に向ふ三人、根
 來に歸る一人、互に歩みつゝ、振り返らぬ心のうち猶更ら哀れ深し、

いろは文字を一人づゝに割り當てゝ、四十七士の用を濟ませし後は、天下に有り餘る
 楷行草の本字幾千萬その數を知らねど、さて現在の忠義ともならず未代の語り草とも
 ならぬ世の中、まして元祿の華奢風流に染め出したる大模様の袖幕は、あはれ先祖が
 血染の關が原を忘れ果てゝ、今や子孫繁昌の奥深く蒔繪の手函香箱を枕として睡る太
 平の夢、

弓矢は白粉臭き楊弓となり、鐵砲玉は女の手を取りし落人の行方となり、陣鐘太鼓は
 色里の三味の音じめに打消され、刀は武士の知行看板、槍は大名の伊達道具、甲冑は
 五月人形の粧飾物、馬鞍は花見の寛活を競ふ寶永年間、

日本一の富士山に一夜の瘧が吹き出るほごの面白い當世ぢや、生きて血の氣のある人
 間が多年酒色の巷に瘡を吹かいで何とする、とけて流るゝ戀の浮世に野暮と化物は禁
 物の大江戸、冬空に鳴り渡り筑波おろしの北風は肌を寒く瘧耳にも立てぎ、八百八町の
 蔓を舐めて戸の寸隙より音なく吹き入る當時の淫風は、千代田の城といはず大名の屋
 敷といはず武士といはず町人といはず、美醜尊卑男女老少貧富無差別、いつしか人の
 脾肉に宿りて惡魔の毒酒に酔へるが如く、腐らぬものは石と鐵、豆腐さへ硬く角張ッ
 て色糸の小唄に合はぬといふ四里四方の歌吹海、

また花は櫻に人は武士といへど、當時の花は春の霞に隅田堤と上野飛鳥の空よりも、
 四季に絶えず物いふ花の君傾城が色香を咲き揃ひし吉原の里に不夜城の全盛、その武
 士も當時の武士は然諾を重んじて一言の下に生死を決する意氣地は繪草紙に残る古昔
 の事、たゞ魂魄脱殻の五體ぞろ／＼裾を引き摺りながら印籠の緒占に妻の簪を外し

て珊瑚の珠を奪ひ、身を護る刀の目貫に男女和合の丸裸を彫り出し、鏢の物數奇に戀歌を刻み、靴の化粧に古錢を嵌め込んで、一切の風俗こゝに歌舞伎の俳優めいたる體、面に紅粉を施して男色の切賣せざりしが、せめて先祖と子孫への申譯、そもく、當時かくまで腐り果てたる此江戸へ入り來りて、五色に彩る満目浮華の輕薄に包まれながら、いづこに身を置いて何を爲さんとせしか、千年の靈跡たる高野一山に糞を残して飛び出せし宥觀の還俗坊と、將軍の三家たる紀州一藩に男を惜んで飛び出したる大泉周左衛門と、見世物小屋の外に買手なき六尺大兵の勘治平、時は寶永六年の夏の七月上旬、田舎は夕顔棚の下涼みながら、江戸は美人の手に送る團扇の風ならでは人の羨まぬころ、

徳川の同じ流れを分けて世に唄はる、天下三家の其紀州家に、そもく、南龍公以來の

物頭を勤めし家筋、いかに不運の孤影を踏み潰さるゝとも、いかに久しく百石の端知行へ落とし込まるゝとも、父祖傳來千五百石の一粒種、人知れず親類縁者の倉庫に預け置きし財寶を當座の金銀に替へて、肌につけ來りし黄金は一身そのまゝ、膝を枕にしながらも十年衣食の用意に餘りあり、されば悠々たる青葉の旅路に道中の景色を打眺めつつ、また始めて下りし江戸の空も知らぬ浮世に尾羽うち枯らすべき筈なく、宥觀を我弟分として養ひ、勘治平を我家來として召使ひ、わざと繁華の巷間に女人禁制の男世帯、まして紀州家から追ひ出されし上は、たとひ一死を甘んずるほどの知己を得るとも、三家追放の身として他の大名へ仕官奉公のならざる掟、周左衛門また固より今更の主取を厭ひ生涯浪々の覺悟、されど徒らに醉生夢死の徒輩となりつゝ、日陰に世を送らんことは元來の天生に取つて身を切らるゝよりも辛き男、年は中流に棹さす二十八、心は自然の磐石に似たる大膽、文武兩道に身を委ねて腕は冴えたり氣は確なり、氏素性

さへ他に劣らぬ此武士道の逸物、そもや元祿以來この寶永年間の浮華淫風に染み渡る江戸の中央に住んで、おめく龜の子の如く手足を無事に縮め終るべきか、その奔馬駿足を繋ぐに等しき大泉周左衛門を父母同胞なき我身の力草と頼みつゝ、兄と仰ぎ弟と呼ばれて坊主頭に還俗の髪を蓄へし後日の宥観、これまた葉蔭に轉がる芋蟲の如く世の中を送るべきか、

先祖より年久しく傳へし紀藩の周左衛門、その身に江戸勤番の縁者なきにあらねど、一切不通、絶えて夢にも訪はず、宥観も根來の頼覺房に依頼の一書を添へられし高田左門あれど、事なき今は無用の身と差控へて其まゝに打過ぎぬ、

浪宅ながら見苦しからぬ家を淺草の田原町に構へて、かはるく二人が隔日に江戸市中の見物、その留守には名倉の勘治平が六尺の大兵を打屈めて廚に働き味噌醬油の通路に彷徨いて往來の人目に立てば、猶更ら町内近所の風聞に上りぬ、全體あれは何物

ぢや、

凛々しく面魂の一癖あるべき武家浪人と、やうく五分ばかりに生え伸びし十六七の毛坊主と淺草門前の仁王に等しい荒男と、以上三人さらに何の世渡る業もなく、悠々寛々として飛耳長目の江戸繁昌に住む體、いよく不審の的となりて四邊の耳に口、やア用心堅固、薄氣味の悪い奴が舞ひ込んだぞ、正體の分るまで油斷大敵ぢや、

今日は宥観の江戸見物に立出でし日、淺草田原町の浪宅には主人の大泉周左衛門、臺所には名倉の勘治平、互に心うち解けて隔意なき主従となりぬ、

「や、勘治平、我等ばかりが毎日の見物に出ても濟まぬ事、いよく明日からは三四日つゞけて汝の番ぢや、はゝゝゝ、人氣の薄い高野の麓とは雲泥の沙汰、がらり違つて流石に日本一の繁華、諺に生馬の目も抜き取るといふ油斷のならぬ素早い雑踏、

なか／＼の面白い見物ぢや、小酒でも飲んで快う見物せい」

「思召、有難う受けますれぎ、さて日限を定めて故國へ歸る身でなし、まづ當分お二方の濟むまで勘治平は臺所の世帯稽古が第一、やう／＼此ごろ麥飯の土鍋癖が手放れまして白い釜飯も焦さず、これからの修行は味噌醬油の汁加減、は、は、は、」

「その汁加減より世の中の人加減が蒼蠅いぞ、勘治平、此ごろ近所の奴等、しきりと足音を忍んで物影より差覗く體ぢや、また我等が出入の朝夕、仔細あり氣に目を敬て、私語く體ぢや、じたい彼奴等、この三人の男世帯を何と申うて居らうな、もし留守番の汝が耳へ、ちらと噂の風でも吹き込まぬか」

「や、それに就いて臺所を常住居の勘治平、をり／＼風聞も耳へ入りまするが、扱とるに足らぬ世間の蔭口、つまりは一家の世帯に女氣のない事と、三人が三人とも主従おの／＼異な體で一切江戸風に無い事と、わけて不審は何をするやら、これとい

ふ世渡りの業が無い事、は、は、は、こりや田舎と格別の人情、さもあらう事かと思ひまする」

「は、は、は、それだけの事か、人は誰しも身の事に氣は付かぬが、なるほぎ、大の男が楊枝を削る江戸の目より見れば、そこぢや、そこぢや、あの宥観に一時も早う結髪させて、浮世の男に仕立てた上、また汝の身體も砥石にかけて五六寸を磨り減らさずばなるまい、は、は、は、は、は、時に勘治平、はや今日も夕暮に近づいたが、我にも汝にも晝までと言ひ残して出た宥観、何として斯う遅いぞ、鬼の棲む里へ丸裸のま、抛け出しても大丈夫な天生ながら、馴れぬ江戸の市中に人目を曳く半僧半俗の異形、もし不意の面倒にか、ッては居らぬか、ふしぎの縁で何とやら肉身の實弟と思ふ奴ぢや」

そのま、夕餐の膳に向へぎも歸らず、夜に入りて燈火の影に待てぎも歸らず、いつし

か浅草寺の初夜の鐘の音に耳を欬つれど猶いまだ歸らねば、ものに動ぜぬ大膽の大泉
周左衛門も今は寤られぬまゝの兩眼、ぱちりと開けて終夜の眉うち擧めながら、はや
曉け渡る東天の鴉の聲となりぬ、
されど宥観、いかにせしか、その日また歸らず絶えて音便なし、

天生の大膽、自然の才氣、案外の工夫と事に當つて不動の根性、物に應じて即座の頓
智、十六の新發意としては古今に凡例あるまじき不思議の逸物、あの荒法師の頼覺房
さへ別離に臨んで一念轉化の行末を怖れしほどの宥観ながら、災禍の厄神は音もなき
不意の横合より家さへ國さへ引き倒すべき魔力あり、
まして浮世も浮世の頂上、その塵を積み上げし大舞臺の江戸には馴れぬ身、もしや
と思へば、浪宅に残る周左衛門いよく身を落着け難し、

きのふの晝までに歸るべき筈、それが夜に入り夜を曉けて今日の朝となり、また晝を
過ぎて夕陽に近きころまで、さす影もなく通ふ音信なき今は南無三寶、正しく不時の
災難に出逢うたり、
されど周左衛門この身も此大江戸には馴れぬ不案内、たとひ一切不通の紀州家を訪う
て親類縁者の手を借ればとて、いはゞ大海の底に小石を探る業、頼覺房の添手紙あり
とは聞けど、その手紙を残して我にも告げず出で行きし上は、番町の高田とやらへも
訪れぬ筈、おもへば四里四方、東西南北、いづこの的もなし、
けに雲を掴む諺、勘治平も自己の拳に自己の毛脛を叩きながらの無念さ、これが紀
州の本國一圓ならば宙を飛び廻つて土を掘り草を分け見る詮議もすれど、悲しや現在
こゝに住む田原町の浪宅を一步立出づれば盲目に等しい我と、六尺の大兵を狭き臺所
の板の間に躍らして泣きぬ、主人の周左衛門、無言のまゝ、兩眼を閉ぢて暫時は木像の

如くなりしが、やうく組みし腕を解いて勘治平を見返りぬ、

「や、ふと思ひ付いたぞ、よくは知らぬが兼てより聞き及ぶ、この江戸に男達と稱へて到るところ繁華の町々に限りもない多くの下種奴を子分に持つとの事、加之も此奴等、それぐ平生より大名旗本の出入あつて、いざ不意の人数入用の節は何時たりとも整へて差入れるが家業のよし、もはや力にも智慧にも及ばぬ今は只これ金の沙汰ぢや、その者ごもに金を與へて四里四方を隈なく探し出せば、さらぬも人目に立つ半僧半俗の異形、それに委しい人相年齢を添へて此奴等の手を借る外に工夫も分別もない、勘治平、この淺草に聞えた男賣の伊達者、ごに住んで何といふ奴か尋ねて来い、面と名を看板にするからは往來の人に聞いても分らうぞ、急げ勘治平、事と次第に依つては一時の取捨ぢや、急げ」

勘治平、はツと答へて入口の戸に音高く額を打付けながら、そのまゝ、聲も出さず門外

の方へ飛び出しぬ、

こゝが江戸市中いづこの町やら、我また何のためやら、方角さへ得知らぬ見物の途中うかとせし身の頭上より大喝一聲、御用の二字に捕はれて、そのまゝ、獄屋に投げ込まれし宥観、夢の如し、

まして十六の今日まで俗界を隔てし千古靈跡の山に育ちながら、浮世も浮世、その浮世の塵の渦を巻いて立上る江戸繁昌の中央へ始めての還俗坊が、突如として思はぬ不意の額に閃く赤總の十手もろとも、脚下を蹴返されて捕られし時は、天生いかに逸物の宥観も身を翻すべき違なく、あはれ其まゝの囚人となりぬ、

叫ぶ奴は竹細工にせよ藁人形にせよ、天下取の威勢を戴く御用の聲には、智者も勇者も道理も人情も只これ言下粉碎の世の中、わけて十六の還俗坊主は小石を擲んで淵に

投ずる如く、出るところへ罷り出て申し開けと喝破せられしが、さて出るところへも
 引き出されねば四方闇黒の牢獄に申し開かん道も寸隙もなし、出家方便、在家正道とい
 ハぎ、末世の出家枯草に等し、いづれ再び芽を吹き出ぬ枯草の我ならば、一日も早く
 此ま、朽ち果て、土になりたし、いづれ浮ばぬ不運の水底ならば、一日も早く此ま、
 溺れて藻屑となりたし、さぞや田原町の浪宅に我行方の空を探し求めん、せめて斯く
 なりし我身の現在を、曉の夢になりとも知らせし、諺にもいふ現世からなる地獄
 の沙汰、その囚屋に投げ込まれて獄卒の手に蛆虫の如く取挫がれ、放火竊盜の惡漢に
 肩を押され膝を組み敷かれて鐵窓の下に繋がれつ、二日二夜に過せしが、流石に佛徒
 より出でて加之も自然の性に不敵の宥観こ、に観念の胸骨を据ゑながら自若として我
 身の末を運命闇黒、當今の在家また闇黒、わけて天下政道の光輝を放つべき此大江戸
 に白日青天の下、そもく我かく何がために捕はれたるか、たゞ一言ながら捕吏の口

より正しく宥観と叫びし上は、黑白方圓の人違ひで無し、人違ひで無き我に眼前いか
 なる罪ありしか、吹き来る無常の風は老少不定、襲ひ来る禍災の厄は賢愚無差別、人
 間この世にありて生滅の外に時々刻々、禍福吉凶、固より覺悟の我ながら、この浮世
 に出でて未だ是非善惡の蒼にも踏み入らぬ初心の首途を、忽ち斯る不意の闇路に押込
 められて倒れん事、無念の至極、心外の骨頂、されど五尺に足らぬ十六の皮肉は盤石
 の下に生き伸びんとするの吞吐に任せし折しも、三日目の朝、牢獄の片隅に眼を閉ぢ
 頭を垂れ身を縮めて膝を抱きし耳元へ霹靂一聲、
 「この還俗小僧、お調べぢや、さア出ませい」
 はッと思はず打ち仰げば、無頼兇惡の首坐を占めたる牢名主の手に襟首を掴まれて引
 摺り出され、無事に戻れと叫ぶ聲もろとも腰骨を蹴飛ばされ、物を抛ぐるが如く囚屋
 の入口より突き放されし宥観、よろくとせし面上を待ち受けし獄卒に打たれ、左右

の両手また宙に吊るが如く、ぐつと捻ぢ上げられぬ、

江戸市中を見物の途上、おもはぬ不意に捕はれて、一言半句の違もなく其まゝ囚屋に投げ込まれ、白晝なほ闇き鐵窓の下に三日三夜の後、やうく始めて引き出されし有観、ほつと額越に蒼穹を見上げぬ、

天は一點の雲なく晴れ渡れぬ、我身の現在、こゝに如何なる災厄の餌食となるやら、いまだ霧れやらぬ胸三寸を五寸釘に打たる、心地しながら、たゞ生れ得たる自然の不敵さと學び得たる修行の觀念に身も慌てず顔色も變へず、傳へ聞く天下黑白の決斷所、古來幾何の涙に洗ひ酒せし白洲の小砂利に押据ゑられ、頭上より鐵槌をもて打下さるるが如き權威の下、そつと仰けば、正面の奉行を閻羅王として左右の廳に居流れたる隨從眷類の徒輩、目を怒らし肩を恃て、牛頭馬頭の鬼に似たり、

「高野山明王院の新發意有観、確と其方か、面を上げい」

うてば響く有観、この一言を聞くや否、はつと思はず身を動かして、人知れぬ自己が小膝を音なく叩きぬ、

さては高祖大師の靈跡を賣物にする末世一山の奴原、この我を無邊の法界に包む能はず、また呪縛の法力に止むる能はず、加之も最勝會の相撲に抛け殺し得ず、おめ／＼影を見送つて浮世の果へ取遁せし曠恙執着の餘憤、この江戸の白金にありと聞き及ぶ野山詰所の手より内々そつと俗界權威の奉行所に横車の訴訟を起したりと、思へば忽ち焰々たる猛火の如き有観、十六の身にあるまじき面魂を振り上げ、やうく生え伸びたる若草山の坊主頭を擦けて、すらりと置き並べし木像を見るが如き體、讀經に馴れし聲まで朗かに澄み渡りぬ、

「は、元は高野山明王院の新發意有観、只今は淺草田原町に浪宅いたしまする還俗も

の、今年十六歳」

「いかなる仔細あつて高野山を遁げ伸びたか、つゝまず白状せい」

「恐れながら宥観、夜に紛れて遁げ伸びは致しませぬ、去るべき仔細あつて白晝に山を立退きましたもの」

「や、案外に言葉の性根ある奴、その仔細、具さに申し上げて見い、何のために立退いた」

「糞騒動のため」

「だまれッ、不埒者め、こゝを何處と心得る」

「は、十六の今日まで佛徒の端くれに育ちまして、高野山の外は一切、いまだ世上に馴れませぬ塵外の身ながら、こゝを如何なる御場所かは篤と心得居りまする、なれご野山退去の原因は正しく糞騒動のため」

「こりや待て、篤と御場所柄を辨へながら、わざと汚らはしい言葉を重ねし上に、萬

一の過言あつては、其方の爲にならぬぞ、慎んで申せ」

さては一山の野狐ごも、おのれ等が踏み破られし法衣の袖を恥ぢて糞騒動の臭氣を包みしまゝ、他の事より我を訴へたりと思へば、この糞講釋こそ大切の要目、あくまで糞に嚙り付いて糞の一點張に押し通さんと、宥観いよく憚らぬ糞度胸の體、

「およそ人間、口より食物を嚙み入れて臀の穴より屁り出しまするもの、これを美はしき言葉の綾に織り直して、そもく何と申し上げませうや、まづ此儀を伺ひまする」

臭きものに蓋するとは世の諺と思ひの外、今や正しく高野一山衆徒の事なりと、そもく壇上へ屁り出せし臭氣紛々の原因より最勝會の相撲に至るまで、いちく具に

糞騾動の所以を申し立て、平然たる看觀の體に、無言のまゝ、聞き居たりし奉行の飯尾豊後守、おもはず正面の座を乗り出しつゝ、今更の目に其顔じろく打守りぬ、

「先刻より下役の者に向うて申し立てた仔細、よく分つたぞ、なるほご其山に育つて其山の靈跡を汚した罪はあるにせよ、居るに居られず立退いて還俗いたした申分は其方にあるやうぢや」

「は、有難く心得まする」

「但し他の寺門とは違ひ、歴々の所領あつて地頭の格式を保つ高野山、その高野山より新發意の身を以て江戸表へ出奔の曲者召捕の上、本山の沙汰として白金の詰所に引渡してくれとの訴願ぢや」

「恐れながら只今の御意、立退いて還俗いたした申分はあつても、やはり野山の訴願に依つて此まゝ、白金の詰所へ」

「いや、渡す、渡さぬは本人の聞くべき事で無いぞ、時に其方、何者の子で幾歳の時に佛弟子となつた」

「父、母、ともに、いかなる者か、二歳の曉、高野山の麓に捨てられましたるもの、幸ひ明王院の師の坊に拾はれて」

「む、捨子か、兩親の名でも書き付けて無かつたか、高野山の麓、何と申す土地の捨子ぢや」

「山上より三里の麓、學文路宿の町外れ大榎の蔭と聞き及びまする、また父母の姓名も無く、たゞ東國武士某一子、この七字が、うみの親の記念と師の坊より平常に申し聞けられ居りまする」

「親なく、親戚なく、たゞ麓の捨子が山上の僧侶に拾はれて、そのまゝ、得度いたした者ぢやな」

「は」

「して此、この江戸奏へ何のために来たぞ、先刻、下役に申し立てに淺草田原町の浪宅とやら、それには十六の還俗坊、其方たゞ一人であるまい、如何やうの者と相住居いたす」

「佛界にも俗界にも一切の所縁なき身、たゞ東國武士某一子といふ七字を故郷の空と心得てまゐりまする道中、紀州家の浪人大泉周左衛門主従の道伴となり、實は其者の許に」

「多年の世俗に馴れたものさへ、容易くは渡り難い世の中を、十六の今日まで塵外の山上に暮した還俗坊、此後、いかなる業もて身を過す覺悟ぢや」

「およそ半月の間、今日まで江戸市中見物の途上、いまだ迷ひ犬たゞ一疋の餓死も見當りませぬ」

「む、面白いぞ、但し高野山の所望に任せ、もし此ま、其方を白金の詰所へ引き渡さば何とする」

「たゞ、運命と心得まする」

飯尾豊後守、おもはず幾度か首肯いて、さらに宥觀の面體、しみぐ打守りしが俄に高き一聲、

「再度の沙汰するまで、従前の通り入牢、申し付けるぞ、なれど御三家方浪人衆の親戚として格別の取扱ひ、揚り屋へ入れ置く」

尾羽うち枯らせし浪々の身ならねど、南の端より流れ來りし東の空、その淺草田原町の夕暮に昔を忍ぶ許住居、
まして一身、いづこの里にも天晴れ立つべき筈の男ながら、天下に羽を伸ばす三家の

威勢、その紀州家より祿を召上げられ、身を追放せられし上は、可憐ら生涯こゝに埋木の花咲く春を捨て、立身の道なく、このまゝ、行末の運を待つべく仕官も奉公も叶はぬ大泉周左衛門、

はや夜に入りし浪宅の燈火に對ひ、壁に映れる我たゞ一人の影を友として、三日三夜、行方も知れざる宥觀の身、また今しも飛び出せし勘治平の歸宅を待ちつゝ、柱に脊を持たせて腕を組みし折しも、門邊に人の訪ひ來し足音、

さては勘治平が探し當て、連れ來りし男達とやら、この江戸市中を我物顔の町奴とやらか、下種ながら斯る事には、頼み甲斐のある奴と聞き及ぶ、それを伴ひ歸りしかと見れば、わざと内より火影の届かぬ門口に立ちながらの聲、

「紀州家の御浪人、大泉殿お住居、こゝで御坐るかな」

待つ影ながらで待たぬ他影、わけて折柄の迷惑、案に相違しながら、正しく身の出所

まで添へての我名を呼ばれし周左衛門、

「仰せらるゝ大泉周左衛門この浪宅、いづれの方か、御姓名」

「いや、ちと内々の者で、憚りながら御意を得た上の事」

ぬツと入り來りしは一人の武士、はや髯の霜毛ちらく五十三四の年輩、着流しの巻羽織に目立たぬ茶絲柄の大小を帯びて、人品骨柄、ごこやりに卑しからぬ風情、加之も慇懃の會釋振、眉うち顰めながらも周左衛門また座を迂りて慇懃の體、燈火を引寄せ掻き立てつゝ、互に相向うて初對面の挨拶、

「御覽の茅屋に只一人の召使まで生憎の不在、ひらに此まゝ御免を蒙つて、御用を伺ひまする」

「じたいの分らぬ者が不意に押掛けての推參、はゝゝ、異なる思召もあらうが、當時お手許に養はるゝ宥觀と申す高野の還俗坊、三日以前に出たまゝの筈、其後の行方を

御存じあらるゝかな」

「や、その宥観は兎も角、重ねての義ながら、まづ御姓名」

「いかにも其事、これは御念ぢや、私邸に罷り在る節は、飯尾作左衛門と申す氣樂者
でな」

「は、御私邸と仰せらるゝからは、また別に御公儀の御役目、いづれ様と仰せられま
する」

「は、其事はすとももの事、たゞ作左衛門で御意を得て置かう、見らるゝ通り供
も召連れず只一人で推参いたしたほごの次第ぢや、實は内々」

「は」

「うちとけて談合いたしたい」

周左衛門おもはず手を膝より落して額越に伺へば、作左衛門また座を進めて小首を差

出しぬ、

飯尾作左衛門、多年こゝに町奉行の飯尾豊後守として善悪邪正の巷に馴れ、人の面體
風俗より音なき息の呼吸までも適さぬ眼中に大泉周左衛門を見て取つて、可憐ら男を
日蔭の捨物と思へる體、周左衛門また田舎武士の浪人ながら氏素性を保ちし名家の一
粒種、虎の威をかる野狐の多き世の中に公私の分を隔てし慇懃の人品を見て、いつし
か打解けし互の心と心、

「お言葉に就いて伺ひまする、その宥観、只今いづれに居りませうや」

「召捕られて入牢の身」

「や、入牢、いかやうの罪で入牢の身となりましたやら」

「知らるゝ通り他の寺門とは違ひ、領主地頭格の高野山、その野山に罪科あらば寺社奉

「行の支配なれど、その野山より寺領内の曲者として訴へし以上は町奉行の手に召捕
ツて、當地白金の高野詰所へ引き渡すべきが定法」

「但し宥観、野山を立退いてこの江戸表へ罷り出ましたる仔細」

「それは本人、年齢にも似合はぬ才氣能辯、いちく具さに申し立て、實は奉行を始
め役人一同、感嘆いたしたと聞き及ぶほどの事、なれど定法の上が面倒ぢや」

「その御面倒、結局のところ、いかゞ相成りませうや」

「こりや事ぢや、まづ寺社奉行を定法の中央に押据ゑて、高野山と町奉行の雙方より
渡せ渡さぬ一條の爭議に、なるかのやうに思はれる」

「さてく大事、もし此方様、其お奉行の處分に在らせらるゝ節は、何と御處置、遊
ばさるゝやら、かゝる事には別して田舎者の萬事不案内、そと御洩らしを願はしう
伺ひまする」

「や、もし我等、その町奉行であれば、いッかな職分にかけても渡さぬ心體、じたい
柔和忍辱の法衣を纏ふものが、わけて慈悲圓滿を千年の靈跡に保ち來った高野山が、
俗界にても事の行き詰るまでは避くべき善の定法を權威の表に振り廻して、たゞ一
人の新發意を獄卒の手に追ひ込むとは言語道斷の沙汰、加之も殺人放火兇盜の業で
なし、その新發意の壇上を汚せし罪は罪として、はや既に最勝會の法樂相撲で相濟
んだ善のもの、さるを毒婦の怨念に等しく此、この江戸表まで執着の繩を打たんと
するは、世にいふ佛のあるところに鬼の棲む諺、この邊の道理は當時の町奉行、よ
く心得て罷りあるけに聞き及べば」

「は、有難き仰せなれど、十六の還俗坊主たゞ一人の事より、大切の御役目と御身分
に萬一の」

「いや、十六の還俗坊は儲置き、たとひ半日の生命を保たぬ死際の不具者に就いても道

理の上に争ふ時は天下の公道ぢや、次第に依つては人の首斬る奉行所に正道の慈悲あるか、また人の罪を助くる佛徒の本山に無道の邪惡あるか、は、は、は、こりや面白世の中の試験ものぢや、但し正邪分明の曉まで、あの宥観うかと放し遣れぬぞ、もし今、許せば却つて敵の願に食まる、結果、たゞ痛はつて當分あのまゝ、入牢させ置く方が本人のためかとも思はれる、まして宥観といふ小僧の天生、なか／＼の分別あつて加之も膽魂の動ぜぬ體、自然と逸物のやうに聞き及べば、狼狽へて泣の涙で身を損ねる事もあるまい」

「かくなりし上は、たゞ何事も偏に宜しく願ひ上げまする」

「は、は、願はれても我等、手に及ばぬ事ながら、ちと仔細あつて以上の大略を存するものぢや、は、は、は、」

年輩といひ風體といひ人品といひ、第一は宥観の身に就いて他より知れぬ筈の事まで委しく打語りし言葉の端々といひ、この江戸に馴れざる我初耳へは只これ聞かまゝの飯尾作左衛門なれど、もし或は町奉行その人ならんかと、大泉周左衛門、一入さらに慇懃の禮を盡して宵闇の門邊まで送り出しぬ、されど町奉行その人ならば、思はぬ不意に草の葉の由縁もなき我浪宅を、わざ／＼何がために訪ひ來りしか、たとひ野山の振舞を憎んで宥観の身の末を憐れむとも、あれほご公私の分を立て、言葉の前後を謹むべき人が、そも／＼何のために供をも連れぬ情の夕暮に忍び來りしか、まだ勘治平は歸らずとも、事實の成行は知れたり、もはや男達とやら町奴とやらに用なし、もし連れ歸らば一應の挨拶に音物を添へて濟む筈、たゞ心に濟まぬは今の訪ひ來りし情、その流れ出でし源泉を汲まんものと、浪人の手輕さに門口の戸を閉ぢて身の用意も無く、宵闇の星明りに透しながら飯尾作左衛門の

影を追ひぬ、

追へば果して思ふに違はず、田原町の角より若黨めいたるもの二人、つと走せ出でて小腰を屈めぬ、

さては正しく其人か、よし然なくとも其人の職分に近く等しき人體、此上は後日のため屋敷を見届け公儀の役目も知らんものと、いよく我影を潜めて後を追へば、上野の方に向うて廣小路より斜めに神田の小川町に出でしが、ある武家の門前に立寄りて一人の若黨に何をか私話きぬ、

その若黨その小門に入りつゝ、また取つて返して門外に出づるや否、俄に夜の大門を開きし真正面より立入りぬ、

周左衛門、此方より此體を透し見て、幸ひ近處の紙屋に半紙一帖を求めながら、あの屋敷を誰殿と聞けば、千石取の旗本衆その名は高田左門、

やれ不思議の縁ぞ、高田左門とは根來の頼覺坊が兄とやら宥観がために兼てより依頼の一書まで添へられし人、されど屋敷は番町と聞き及ぶに今こゝは神田の小川町、同名異人か、まして飯尾作左衛門といへば尙更ら其屋敷の主人でもなき姓名相違、おもはず小首を傾けながら、半町ばかり門前を行き過ぎて、折しも通りかゝりし武家奉公の下人らしき男を呼び止めつゝ、おのが用あり氣に高田左門を問へば、近ごろ番町より引移られし御人と、同じ屋敷を教へて其まゝ立去りぬ、

いよく儲は其の高田左門、あの飯尾作左衛門は途上に立寄りし客分と知りながら、なほも委しく問はんと、また四邊の町家に蠟燭一挺を求めて何氣なく武鑑談話を持ち掛け、果して當時の町奉行に五千石取の飯尾豊後守と聞き出しぬ、

夜に入りて後、おもはぬ不意に立寄りし飯尾豊後守と、これを迎へて奥の小座敷に伴

ひし主人の高田左門とは年來の友垣、互に隔意なければ膝を交へつゝ、心も言葉も打解けての物語、

「御用の多い身、わざ／＼この夜分、いづれへの御歸途ぞ」

「平常に忙しい身は却つて物數奇の外出が面白うて、はゝゝゝ」

「忙中の閑日月、さも御坐らうな、その忙中に悠々たる閑日月あるほどの體でこそ、また近來の名聞、蔭ながら喜び居りまするぢや」

「いや／＼、その名聞も身の面目も入らぬ事、わけて昨今、奉行職が、とんと氣に濟まぬ心地、次第に依つては御役御免を願はうかと存じて」

「はて、異な事をいはるゝ、知行取の出頭出世は兎も角、公邊の御鑑定に叶つての職分、申さば器量の試し場所、それを氣に濟まぬとは」

「高田殿、お身と我等とは元來の他人ながら、ふしぎの御縁で骨肉に等しい永久の間」

柄、この飯尾が人知れぬ近來の苦しさを、友達甲斐に、聞いて下さるまいか、たゞ聞くだけの事、さて／＼人間、おのれの身に事のある時は我ながら案外の氣弱いもの、妻子よりも親戚よりも、これと思ふ打解けた同氣の友に割つて語れば、また少しは苦痛も薄らぐかのやう、實は飯尾作左衛門、豊後守としての今日、ふと思ひの外、當惑が御坐つて」

「當惑、貴方ほどの油斷ない御人が、まして豊後守としての上に思ひの外、當惑とは、お言葉までもなく高田左門、不肖ながら多年の友達甲斐に是非とも承りたい、たとひ如何やうの難事に致せ、うちあけて話されたい」

「高田殿、この飯尾作左衛門め、これまで人にも世にも相應の名を知られてまるつた五十三の今日、婦女兒輩の弄ぶ繪本の因果物語に落ちました」

「何、繪本の物語とは」

「面目も無い次第、天下政道の一端を預かつて他の黑白を決断すべきものが、往昔の夢に残した自己の罪に、今この身を責められて、いはず語らぬ心の辛さ苦しき切なさ」

「重ね々異な事ばかり承る、じたい如何なる案外の儀で、さほごまで平生に見受けぬ愁眉を寄せらるゝぞ」

「恥辱も外聞も捨て、お身の前なればこそ、ありのままに申さうか、この飯尾豊後守、町奉行として十餘年以前に捨てた其、その我一子を召捕り、加之も白洲へ引き出し入牢させました」

「えッ」

主人の高田左門、おもはず膝を進めて其顔うち守れば、流石の豊後守も兩眼に溢るゝばかり男泣の涙を含みぬ、

諺にいふ水の流れと人の行末、もとは同じ泉の底より出でながら、互に別れしまゝの淵となり瀬となりつゝ、いかなる谷間を潜りし果に落ち合ふやら、うき世の離合集散、常なきかと思へば自然の運命まだ血筋の縁に定規あるが如し、

快刀亂麻を断つべき飯尾豊後守、千人の生膽を料理するほどの難事にも驚かぬ筈の日に思はず涙を浮べつゝ、多年の友と契りし高田左門に向うての物語、

「この作左衛門、實は飯尾家の次男、今でこそ少しは人らしい、世間の手前にも立ち公邊の役義も致せ、さて若年の頃は言語に餘った大の横道者、父母なき後は兄親といふ、その一人の兄を手鞠に取つての我まゝ三味、果は一家の親類にさへ見放され、また家を追ひ出されて勘當の身となりし後は猶更の放埒、この江戸に住み兼ねて、東海道を一年越に上方筋へ流れ行き、京に二年の月日、大阪に三年、その大

阪も喧嘩の相手を殺しはせざれど、無慙に六人まで傷つけしまゝ、身を忍んで泉州の堺へ落ち込み、町外れの湊村に尾羽うち枯らした浪々の業、あらう事か兩刀まで賣り捨て、やうく傘を張って其日の露命を繋いだ艱難中、重ねく面目もない不所存ながら、これも今更かへらぬ若氣の至極、ふとせし農家の娘を誘ひ出し、その女と共に岸和田の片邊りに、夢うつゝの淫奔夫婦」

語りながら俄の無言、おもはず頭を垂れて兩手を膝上に置きつゝ、差俯けば、主人の高田左門、わざと微笑を浮べて興ありけに打解けし體、

「や、誰も若輩未熟の頃は、得て過失の多いもの、はゝゝ、なれど飯尾殿としては生涯に一度の珍談ぢや、さほぎの面白い珍談あつてこそ今日の飯尾殿、いよく身に光輝を増す道理、また不肖ながらも平生の氣を許さるゝ左門なればこそ、かゝる昔の内事も斯くまで打明けて言はるゝかと思へば、これが眞實の隔意ない友垣と申すもの」

「高田殿、儲これからが身に取つて猶更の深い罪、その女は産後の難病に死に果て、残つた一子これぞ正しく氏素性ある武門の種に生れし男子ながら、あはれや父が父なり時が時なり、わけて件の境涯に致し方も無く、懷中に抱き入れて朝夕その片田舎を貰ひ乳に一年餘りの後、つらく思へば迎も世に甲斐なき不運の奴、なまなか我手に育て、淺ましい境涯に連れ落さうよりは、東西も得知らぬ今のうち男を止めさせて佛縁の端に捨て、塵外に身を全うさせんものと、幸ひ近き紀州の高野山その麓の學文路宿へ東國武士某一子といふ七字を親の記念として、高田殿、すやく睡つたまゝの乳香子を、この鬼めが捨てました、忘れもせぬ二月の二十四日、雨氣を含んで空に星の影もない大榎の根下へ、この作左衛門、うまれて以來その時が始めての念佛を唱へて」

「お察し申す」

「その捨子いたした年の夏、また大阪へ流れ込で、をりから江戸の縁者が城代附となつてまるつた者に出逢ひ、その者の許に暫時の厄介、しみぐと身の後悔いたした時、兄が頓死の報知に、この不孝不悌の横道者が飯尾家の主人となり、また今日の豊後守となつて十五年の間、他人には固より現在、連れ添ふ今の妻子にも得はず、たゞ自己一人が夢にも寢覺にも忘れぬ其、その高野の麓へ捨てた往昔の一人子を高田殿、怖ろしや因果の業か、召捕つて入牢させましたぞ」

わざく何がために縁なき我浪宅を訪ひ来しかは知らねぎ、その飯尾作左衛門を町奉行の豊後守と知りし上、宥観の身に就いて餘所ながら深き情の言葉は千萬人の力草、加之も影を追うて其人の屋敷かと思へば、思ひも寄らぬ高田左門、これぞ根來の頼覺

房が兄と聞き及ぶのみか、その高田が方へ夜途に立寄りし飯尾は正しく知合の間柄、ふしぎの縁の糸を手練れば宥観の身の末、猶更ら易しと大泉周左衛門、そのまゝ小川町より引返しぬ、

禍の起るも思はぬ不意、幸の來るも思はぬ不意、たゞ束の間に一時は雨となり風となり照る日となりて、人の運命は轉ぶが如き表裏輾轉、

かくとも知らぬ勘治平、宥観の行方のみか俄に立出でし我不在へ歸り來て、ぬしなき宿の戸口に嘸や猶更の心を痛めん、力は世の常に餘りて身材は六尺を超ゆる大男ながら、元來の器は淺く加之も事の分別に足らぬ勝の正直者、一入さらに哀れなりと、足を早めて上野の廣小路へ差かゝりし頃、まだ夜は更けぬぎ往來の人も稀なる闇を照らして、三枚橋の方より近づきし提灯の火影を何心なく見れば、我家の紋所と同じ丸に鷹の羽、

片田舎の瘦村でさへ紋と名の同じ他人は珍らしからぬ凡例、まして日本一の大江戸に寸隙もない百萬の人数さらに怪しむべき筈は無けれど、あれこそ紀州家に人も知りし大泉の先祖傳來、あの紋所を闇の馬上に蹄の音高く照らせば、藩中の諸士いづれも道を開いて頭を垂れし其家の子孫が、かく世に落ち果て、犬に吠えらるゝ浪々の淺ましさと、ありし昔を忍びつゝ、刀の柄を袖に巻いて思はず佇みぬ、家の盛衰、身の變遷、羨むにもあらず待つにもあらで、たゞ何となく戀しく懐かしく立停れば、一人の下郎に其の提灯を先立たせ一人の若黨を背後に従へつゝ、悠々として出で來りし羽織袴の武士、周左衛門の前を行き過ぎながら、ふと振り返りて火影に差覗くや否、はッと思へる體、

「や、本家殿か」

周左衛門また驚いて見直せば、故國の我分家に同じ大泉を名乗る再從弟の同苗甚之丞

とて、一門のうちながら、元來の家風も格式も等しからねば平生より疎遠の間、されど逢へば互に無縁の他人でなし、

「これは案外、おもはぬところで逢ひ申した、周左衛門、主家を立退いて半年も経たぬ今、はや既に浪人馴れた此の風體を見られい、諺にいふ人と魚とは流れ行く水次第ぢや、はゝゝゝ、いづれ其うち、また時機もあらば」

言葉を殘せしまゝ立去らんとする周左衛門の袖、甚之丞おもはず慌て、取りぬ、

一門の同族ながら元來の家風も違ひ、わけて父が最後の時は相手方の威勢を憚りて親類甲斐の手も足も出さざりし奴の一子、また我ためには再從弟なれど君前不首尾の家を嗣ぎし孤子とて平生は疎遠に打ち過ぎしほごの心體、その同苗甚之丞に思はず逢ひし夜途の袖を捉へられて、加之も今更ら俄に慇懃の挨拶せらるゝ周左衛門、いよく

面白からず眉を擧めぬ、

「相傳の君に見放され傳來の家祿を召上げられ、加之も追放せられしほぎの出世冥加に盡きた周左衛門、もはや同苗とて紀州家の人々に縁は持たぬ覺悟ぢや、折角の御言葉ながら我等の身勝手、このまゝ、別れ申さう、但し大泉といふ同じ姓を名乗らるる上は自然の家筋に取つて他人ならぬ事、随分お身大切に行末の武運長久、祈りまゐらす」

「やれ、また本家殿の意地が出る」

「何と致さう、當世に流行らぬ此、この意地が父子の持病ぢや、それがため父は算盤の珠に外れた最後、その一子は世に落ち果てた浪人、はゝゝゝ」

「なれど父御の墓石は今なほ其まゝ、本國の菩提寺、まさか脊負うて出られた事も無い筈」

「異な事いはるゝ、荷馬でなし地車でなし、わけて百五十五里の山河、父の石塔は脊負うて立退かぬが、父祖傳來の君に盡した手柄も其まゝ、紀州家の本國へ残して出た筈、や、うかく夜の立談に無用の暇とつた、御免なれ」

あとも見返らず、袖を拂うて立去りし背後より甚之丞また足早に追ひ來り、聲を潜めながら呼び止めぬ、

「本家殿、本家殿」

周左衛門、闇にも輝く兩眼、ぎろりと光らせて振り返りぬ、

「その他に用ばし御坐るかな、ちと差當る事あつて浪宅へ急ぎの身ぢや」

「お手間とらさぬ、只今いづれに浪宅せらるゝか、それ承知いたしたい」

「先刻も申す通りの事、もはや親親縁者として紀州家の人々に用を持たぬ身、秘すではない、浪宅へ御案内、此方の迷惑に存する」

「いや、わざ／＼推參しようでもないが今日、この上野寛永寺の寺中へ御川の儀でまゐるツた歸途、かく思はず御出逢ひ申したは不思議の幸便、實は今、お耳に入れた父御の墓石ぢや、貴方お家を立退かれて後、いろ／＼重役の詮議あつて、いはゞ我まま勝手の喧嘩死いたした者の石碑を其まゝ、第一あれほゞ人の目に付く立派さは主君への恐れありとの事、まして以後の訓戒に斷絶追放の廉を明白にして、氣の毒ながら取潰さうか、他所へ運び退けんかとの評議最中、ちらと洩れ聞いて流石に縁者の身の一入、辛く存じた折柄」

きくや否、大泉周左衛門、ぐるりと身を向き直して甚之丞の面前に立ちぬ、

はや夜に入りて猶更ら氣も心も上の空、足も地に付かで田原町の浪宅へ走せ歸りし勘治平、燈火かき立て、我を待たる、かと思ひの外、門口の戸を閉め切つて火影も漏れ

ざるのみか、鍵さへ固く主人なき體に、おもはず眉を擧めて軒下に立ちぬ、

さては我歸宅の遅きを待わびての工夫、また別に思案の道あつて出で行かれしか、但し馴れぬ廚の面倒さに夕餐の食事せんとて出られしか、

平生うちとけて馴々しく物いはねば、軒を並べし近所合壁に聞き合しても知らぬとの挨拶、大力の業に音なく門口の鍵を捻ぢ切り裏口の戸を外すは易けれぎ、田舎者の勘治平、そのまゝ、其處を動きも得せず、しきりに往來の人影を透し見ながら六尺の大男

しよんほりと闇き軒下に立てる體、あはれや繼母に閉め出されたる小兒の如し、

をりしも夜更けに草履の足音、人知れぬ心のうち、しめやかに腕を組みつゝ、歸り來りし主人の周左衛門、

「誰ぢや、勘治平か」

「や、御歸宅」

「そこで何をして居る」

「一時ばかり前、宵の口に戻りましたれど、門口も裏口も」

「は、ふと急用の事でちや、かうも遅うはならぬ筈が案外、また思はぬ途中に暇取ッてな」

それと鍵を渡されし勘治平、門口の戸を開けて黒闇を探りながら、燈火の見ゆるまで其ま、悠々と軒下に待ちし周左衛門、静に入りぬ、

「さうぢや勘治平、あの事に就いて頼み甲斐のある男、探し當てたか」

「何が儲、この不案内者、それから其處と聞き傳へて、やうくの事、當時この江戸で音に聞えたものを尋ね當てました、ところは山谷堀、今戸橋の片邊で橋の名を其ま、今戸の庄五郎と申す男」

「む、土地の橋の名を人に呼ばる、男、いづれ世に聞えた名物、武家ならば大名分ち

や」

「お言葉の通り江戸なればこそ斯やうな男、見るが始めて、いかにも町人の大名生活年ごろ五十二で、小兵ながら骨格の張った目の玉の輝いた赤ら面を抜け上げの大額、委細うちあけて頼むといへば機關人形のやうに首肯いて、土地に不馴れの御浪人衆は猶更の御迷惑、及ばずながら庄五郎が頼まれましたとの打ち解けた挨拶、ついでには明朝これへまるる筈」

「なるほご、それが聞き及ぶ町奴の男達といふものぢや、なれど勘治平、おもはぬ不意の事で宥観の成行は知れたぞ、もはや其男に用は無、但し頼み放しのま、では濟まぬばかりか、わざく來られては猶更に氣の毒さ、おぬし明日の朝、夜あけぬうちに出向いて、音物の目録に謝絶挨拶を添へてくれ」

「や、行方が知れましたか、いづれに、何として」

這ひ出す如くに問へば、周左衛門、飯尾作左衛門が訪ひ來し事より高田左門が事まで、また歸る途中に同苗甚之丞と出逢ひし委細を語りし後、何とやら俄に目を閉ぢ容を更めて思ひ入りし一思案の體、されぎ生れ付いて言葉は尠し、
「ぬしの今戸へ出向く時、我また紀州家へ行かて叶ふまい」

人は浮世を追うて走るが如く、浮世は人を欺いて弄ぶが如く、その間に運命の神は手を拍ツて笑ふが如し、

おもはぬ不意に我浪宅を訪ひ來し情の飯尾作左衛門は、果して町奉行の豊後守、その立寄りし小川町の屋敷は根來の頼覺房が兄と聞き及ぶ不思議の縁の高田左門、もはや宥觀の行方は知れたり、加之も萬一の時は手足を踏み入れて救ひ出すべき方便もありと、大泉周左衛門、こゝに雨後の月見る心地しながら、その歸途に自己また身に降り

かゝる涙の雨、思はぬ不意の同苗甚之丞に出逢うて、きけば故郷の空に残せし父の墳墓を取潰しの沙汰ありとの事、

たとひ不忠不義の大罪ありとも、既に時は去り事は過ぎて現在その家なく人なき後は自然に詮議の沙汰もなき筈、さるを何事ぞや、よし無益の喧嘩口論にせよ、兩成敗たるべき一方の相手は閨門の香粉に縁あるがため、今なほ歴々として時めきながら、その一方の我家のみ相傳の知行を召上げられ由緒の家門を取潰され、加之も一子の嫡流こゝに追放せられて、生涯の仕官奉公も叶はぬ浪々の身となるのみか、今更ら父が墳墓を掘り返して取退けむとは鬼畜に等しき業、さては君前を闇として身向の紅白粉に媚びつゝ、縁に繋がる奸邪の出頭人へ諂ふ奴等、おのれやれ、狼狽眼に見違うたか、この周左衛門當年二十八の男、そもく子として年經し父の白骨を其奴等の手に觸れさすべしや、

されど平生の無口、事に騒がず物に動せぬ天性、鐵火を呑むが如き苦痛、じつと堪へて顔色にも出さず、腸を劈く悲憤の涙も目に浮べず、その夜は其まゝの枕に東天の鴉聲を待ち受けて起き出づれば、はや今戸橋の庄五郎が許へ行かんとて勘治平も飛び起きながら朝飯の用意、

「や、勘治平、ちと心が急ぐ、今朝の飯は欲しうない、なれど汝は、ゆるく喫べて出い、前夜のうちに包み置いた今戸橋への目録こゝにあるぞ、働かずとも快く頼み甲斐のあつた男、随分その氣を損ぜぬやう懇懇の辭儀して來い」

こればかりは浪人ながらも流石に用意の禮服、麻の上下を風呂敷のまゝ、小脇に抱へ、誰が目にも今の境涯には過ぎたる父祖傳來の業物を腰に横たへ、いづこに憚る身ならぬ編笠に面を包んで、ぶらりと田原町の浪宅を立出でし大泉周左衛門、一町あまりも行過ぎしが、俄に立戻つて門口より勘治平を呼び出しつゝ、聲を潜めぬ、

「さして言ひ置くまでもないが、紀州家の上屋敷で同苗、大泉甚之丞といふ者の許へ行くぞ、自然また歸宅が遅くならうとも心配すな」

四代以前の分家、現在の我とは再従弟の間、加之も故郷と江戸に父子うち揃うて無事息災の身を持ちながら、たとひ家名斷絶の後にもせよ、おのれがためには大泉の本性ある宗家の我父、その墳墓を發いて取返けんとするほさの言語道斷、一句の申立も得せざる腰拔、もし前夜この我に出逢はずば、おめく手束ねて餘所に見るべき白癡面、まして一門とはいへ平生より元來の疎遠に打過ぎし奴、猶更ら斯る時は草の葉蔭にもならざる卑怯者なれど、追放せられし身の悲しさ、兎も角その甚之丞が許を訪うて、分別する外に道なし、

やうく曉けし空に鴉の聲を聴きしのみ、まだ市中の屋の棟に前夜のまゝの露滋く朝

日の影も渡らぬころ、田原町の浪宅を立出でし大泉周左衛門、
 そもく此の江戸を見物の最初、何は儲置いて父祖傳來の勤めし所と、第一に紀州家
 を人知れぬ懷舊の涙に注ぎしかば、外の不案内に似ず道を急いで紀尾井阪の屋敷へ行
 き着きぬ、

たゞ一口にいへば喧嘩口論の決闘なれど、事の起因は武士道の意地に依つて身を過ち
 し父、人目には嘸や君を恨みし血氣の不所存者と唄はれんが、藩中に持て餘せし君寵
 の狂犬を研つて追はれし我、父子ともに男の一分を立て、斯くなりし上は、今更ら家
 も知行も惜しからぬも、南龍公以來の名臣中に數へられし大泉家の嫡流、馬の嘶く聲
 もろとも轡を鳴らして出入すべき筈の周左衛門が二十八の今日、浪々の姿に頭を垂れ
 肩を凋め腰うち屈めて門番の下郎にさへ憚りながら、平生の心に打解けぬ縁者の端を
 便りて蟲の如くに這ひ込むかと思へば、諦めし身にも何とやら無念なり心外なり、ま

して父の片敵手は其儘の家名相續に今尙全盛の眞最中、わけて年經し父の墳墓を掘り
 返され形も全からぬ白骨まで其奴等の手にかけれんとは、悲憤の涙を呑み込み、沸
 き返る腸を静めつ、今日まで本國の日蔭に押込まれて江戸勤番の下司下郎に顔を知
 られぬが結句の侍僮、編笠を脱ぎ刀の柄を袖に巻いて小門の此方より中腰に進みなが
 ら、豫て御存じのもの當お屋敷の大泉甚之丞殿に御意得たしといへば、見苦しからね
 んぞ周左衛門の浪人姿を打守る門番、素頭も動かさず目を剝いて俄の大聲、
 「通らッしやい、その二重門の堀際を右に折れて當れば諸士の取次所、頭をあけて脇
 目はなりませぬぞ」

大盤石に押へらるゝとも容易くば首骨の曲らぬ周左衛門、わざと慇懃に會釋して打通
 りながら、教へられし諸士取次所の入口に、またもや腰を屈めて額越、
 「大泉甚之丞お長屋、いづれに御坐りまする」

物頭ものがしらの家に生うまれて千五百石こくの嫡流ちやくりゆう、父ちちの死しご後は殆ほとんど捨すて扶持しほ持ちの日蔭ひかげ者ものとなりしが、流石さすがに聞きこえし大泉おほいづみ周左衛門しうざゑもん、また江戸詰えどづめの勤番衆きんぱんしゆうにも名なある知行取ちぎやうどりこそ自然しぜんの交際まじはりあれ、たゞ徒士かちの輩ともがらには顔かほさへ知しられぬを結句けつぐの倅しあはせ、そのまゝ無事ぶじに門もんも詰所つめしょも打ち過すぎて同苗どうべう甚じん之丞のじやうが住居すまひの入口いりぐちを差覗さしのぞきながら、わざと聲こゑを潜ひそめて案内あんないを乞こひぬ、こゝにも幸さいはひ本國ほんごくより連つれ来きたりし家來けらいならで、この江戸言葉えどことばに馴なれたる下郎げらう、甚じん之丞のじやう殿どの御在宿ございしゆくかと問とふをも待またず、いざ此方こなたへといふ顔かほみれば、果はたして前夜ゆうべの途と中に主人しゆじんの供ともせし提灯ちてい奴やつこなり、御免ごめんなれと一室ひとまに打うち通とほりし周左衛門しうざゑもん、茶ちやを運はこばれ菓子くわしを持もち出だされたるまゝ、待まてぎも甚じん之丞のじやうの出いで来きたらねば、襖ふすま越こしに聲こゑかけて、「御家來衆ごけらいしゆう、甚じん之丞殿のじやうどの、いづれかへ出でられましたかな」

聲こゑに應おうじて一人ひとりの若黨わかたう、によつきり有馬筆ありまふでの如ごとき襖ふすまの間あひだより首くびを差出さしたしぬ、「主人儀しゆじんぎ、早朝さうてうより急きふの御召ごめしで先刻せんこく御殿ごてんへ、その節せつに申まう置おされましたは、貴方様あなたさまいづれ入いらせらるゝとの事こと、暫しばらく時ときお待ち下くださるやう」また其そのまゝ首くびを、ぬツと音おとなく引ひ入れて、隔へだての襖ふすまを閉とぢぬ、勤務つとの身みは是非ぜひなしと、周左衛門しうざゑもんたゞ一人ひとり、その一室ひとまに端坐たんざして無言むげんの體てい、凡およそ一時ときあまりを待まちしが、急きふお召めしに依よつて御殿ごてんへといはれし上うへは催促さいそくのならぬ事こと、まして他家たと違ちがひ我わがためにも父祖ふそ傳來でんらいの君きみと仰あふぎし屋敷やしきのうち、猶なほ更さらら以もつて追放つほうの身み、いとゞ萬事ばんじに憚はにかりて處女しよぢよの如ごとく差控さしひかへぬ、差控さしひかへながら周左衛門しうざゑもん、つらく思おもへば空吹そらふく風かぜに等ひとしき人の行末ゆくすゑ、いづこが果はてやら終きはりやら、さしての罪つみなきに家は潰つぶされ身みは追おはれて、加之しかも父母ふぼなく妻子さいしなき獨身どくしん孤影こゑいの我われ、たとひ此このまゝの生涯しやうがいを知らぬ他國たこくの浪々らうらうに流ながれ渡わたるとも、もはや再またび過すぎ

し昔の小蔭を訪うて立寄るまじと思ひしに、思ひの外は今またこゝに曳かれ来て、平生うち解けぬ縁者の端に肩を縮めつゝ、其歸宅を待たで叶はぬ不運の身、無念なれど悲しや時得し小人原を相手として、父が墳墓を發かるゝの恐れあればこそ、さりとして斯くなりし上は、斯くせし奴原を敵に取つて荒立てんよりは、たゞ靜に子として父の靈を守るの外なし、もしや叶はずば江戸より紀州まで往來の日數を乞うて我手の涙に墓を取退け、その白骨を首にかけて去るべしと、人知れぬ思案の臍を固めぬされど今かくと待ち受けし主人の甚之丞さらに歸らず、加之も留守居の若黨と下郎さへ、いつの間にか立出でて我たゞ一人を取殘せしまゝ、家内に音なく聲なく、ひっそりとして空屋の如し、

周左衛門、おもはず眉を擧めて入口を差覗けば、はて不思議や、容の我ありと知りながら戸を閉ぢたり、

東天の鴉聲と共に起きて田原町の浪宅を立出で、やうく朝飯の済むや済まざる頃に訪ひ來し我、まして途中ながら前夜あれほご約束を固めし我、いかに急御用とはいへ、もし急お召ならば猶更ら早く御殿を下るべき筈の甚之丞、待てどもく更に歸らぬのみか、はや正午近くなりて留守居の若黨も下郎も何處へか立出でしまゝ、影なし、加之も案外、何事ぞ我たゞ一人を置去にして入口の戸を閉ぢんとは、

周左衛門、おもはず眼を光らして一室の四方を見廻しながら、さては底あり、この我を深いところへ引入れしか、もし萬一の時は入口の戸を蹴破つて飛び出すも易く門番の奴原を人礫に取つて遁るゝも易けれど、茲は正しく父祖傳來の祿を食みし舊恩の江戸屋敷、わけて現在の我は追放せられし浪人扱ひの身、うかく動かば却つて人知れぬ敵の術中に落ち込むべしと、元來の大膽、そのまゝ悠々として茶盆を引寄せながら

主人の心と共に冷き茶を汲んで一口ぐつと呑み乾しぬ、

もはや尋常事ならずと見て不敵の腸を押し据ゑし周左衛門、第一は父が墳墓の沙汰、その事の結局を聞くまでは一寸も動かじとの顔色、我家にあるが如し、折しも入口の軒下に人の足音、しきりに戸を叩きぬ、

「大泉殿、大泉殿」

呼ばれて周左衛門、何心なく振り返れば、横の半窓より差覗く三四人の諸士、

「や、大泉殿でない、こりや見知らぬ人ぢや、大泉殿いづれへ往かれたか、家來の者も見えぬぞ」

は、と高く笑うて打連れながら過ぎ去りし體に、周左衛門、おもはず死毒を舐めしが如く満面を皺めて差俯けば、また何物やら通りがけに戸を叩く音、

「この白晝に門戸を閉すとは何事、や、幸ひ今日の非番に骨休めの晝寝めされたな、

は、は、は、は、」

またもや半窓より差覗いて案外の人違ひに驚ける體、されど此奴また其まゝ空嘯いて行き過ぎぬ、

いよく、偕は謀られたり、加之も人もあるべきに甚之丞め、おのれ親類縁者の端くれに血筋を持ちながら、前夜たまく出逢ひしを幸ひ、手柄顔に小人原の綱となつて我を引寄せし上、その姿を隠して斯くまで嘲弄せんとは、諺にいふ獅子身中の蟲けら奴、わざく探し出しても刀の汚れ、見付け次第に蹴倒して踏み殺しくれんと思へども、この戸一枚を破れば忽ち狼藉者に落さん謀策、さりとして此まゝ夜に入れば屋敷の門限時刻に不審者とせん謀策、名乗れば君の愛犬を斬つて本國より追放せられしもの何故に入り込みしとの詮議に逢はん、

もはや事こゝに至りて今更ら何とすべき、父が墳墓の沙汰、我身の運命も彼奴等が心

の自由、但し大泉周左衛門、もし叶はぬ最後に男一代いかなる振舞あるか、後の世の語り草に紀州家の名物談柄を傳へてくれんごと、また一入さらに胴骨を押据ゑて春の花見に取残されたるが如き悠々寛々、

一切さらに縁なき他家他門の屋敷ならば却つて易けれぞ、父祖傳來の祿を食みし紀州家の江戸屋敷、加之も追放せられし浪々の身が、なまなか親類の端くれに連なりし其奴の術に落ちて、あるべき事か白晝に入口の戸を閉ぢられ過ぎ行く諸士に窓越の嘲弄せられし大泉居左衛門、あはれや可憐ら逸物の捨時、もはや武運の末なり、まして斯くなりし不覺の原因は、子として父の墳墓を守らんがための我、道を以て欺かれしかと思へば猶更の無念、夜盗に寢首を搔かるゝよりも心外なり、心急くまゝ、今日の朝飯も食はず、閉ぢ籠められしまゝ、晝飯も食はず、はや窓より斜めに射し込む夕

陽の影、同じ勤番住居の隣家に人はあれぞ、今更ら壁越に聲高く我名を名乗らば恥辱の上の恥辱を重ねるのみか、いづれ同腹の奴等なればこそ今朝よりの不知顔、たとひ啼く音の哀を乞へばとて耳に入るべき筈なしと、そのまゝ、觀念の胸を据ゑて暮れ行く家内の薄闇に只一人、

江戸見物の途中、おもはぬ不意に捕はれて囚獄に投げ込まれし宥観を、世に落ち果てし災禍の底と思ひの外、また思はぬ不意の飯尾作左衛門が當の奉行として餘所ながらの情あり、かつは兼てより根來の頼覺房が兄と聞き及ぶ不思議の縁の高田左門と觀しき體を見れば、その宥観に却つて浮ぶ瀬もあれ、この周左衛門こそは正しく四方を取り圍まれて遁れ難き災禍の底、さても前夜まで彼が行方を尋ねし我また此後の彼に我行方を尋ねられん、加之も前後うち揃うて斯る不連の二人に隨従ひつゝ、生れ故郷を離れし東の空に六尺の大男が小兒の如き哀れさ、思へば無縁の他人の以上三人そもく

いかなる因縁あつて斯くなりしかと、流石の武夫も人知れぬ黒闇に男泣きの涙一滴、折しも窓越に軒下の闇を破つて、ぱつと照らす提灯の火影、周左衛門おもはず闇中より眼を注げば、やがて入口の外に三四人の足音、されど戸は開けず聲のみ高し、

「委細は存ぜぬ事、たゞ我等は確と返答のみを承りにまるつた、この家内に居らるる浪人殿に常家重役よりの御用、神妙に出らるゝならば其まゝ案内いたさう、但し異存あらば主人の歸るまで其處に其まゝ待たれい」

すはこそ野狐めが正體を現はし來れりと、周左衛門、逆立つ憤怒の眉に闇をも貫く眼力を光らせながら、入口に向うて胴骨より絞り出すが如き中音の太聲、加之も騒がず淀まず飽くまで落着いたる言葉の端に冷かなる微笑を浮べぬ、

「委細を御存じなき提灯の口上使者に此方も無用の委細は申さぬ、ごこへ狼狽へて遁け失せたやら穴の知れざる主人の歸宅を待たうよりは、身に取つて僥倖の事、何の

御用かは知らず御當家の重役衆へ罷り出まするぞ、見苦しき浪々ながら兼て禮服一着は持參のもの、また御案内の途中もし我等が腰の業物お氣にかゝらば暫時お預け申さうか、兎も角も其の入口の戸を開けさつしやい」

晝は大立關を預かる諸士の交代所、夜は内立關を守る當番の宿直所、その一室に導かれたる大泉周左衛門、流石に追放せられし舊臣の身として、丸腰のまゝながら、用意の麻上下を着けて悠々と坐せし體、まばゆき燭臺の反射に面も觸らず、我影に控へし五人を何のためとも見返らず、袴の膝を割り胴を据ゑ首骨を兩肩の間に立て、動かぬ面魂、ごこまでも落着いたり、

正面の襖を開いて立出でしは重役の一人、四十八九の嚴めしき出頭面、今しも殿中の君前より下り來りしまゝの體、じろりと周左衛門を見るや否、

「や、これは儲、誰かと存じたに大泉殿の子息ぢや」

みれば父が在世の頃、普奉行の下に算盤球を弾いた百石取の勘定方と聞き及びし男、さては其後、自己が運まで弾き出して今この江戸詰に重役の一人かと、周左衛門、おもはず冷笑を浮べながら見上げぬ、

「大泉周左衛門と御存じなくて、ここに召されましたか」

「いかにも、たゞ浪人風體の者が主人不在の家に今朝よりと、のみ聞き及んでの不審なれぎ、甚之丞殿と同姓縁者の間柄は江戸詰の若輩衆が知らぬ事、こりや其筈ぢや、は、は、は、さて其後は誰いふとない風聞、大阪邊と存じたに、いつごろ當地へまゐられた」

「切腹、仰せ付けらるべき筈のところ格別の御慈悲を以て追放との御申し渡し、それを大泉家最後の御恩と心得、有難く頭に戴いて其まゝの足を東へ向けました、また

今更ながら、父子ともに御承知の不所存者、わけて萬事當世の人氣取には不得手の拙者、かくなるべき筈と存じまするぢや、は、は、は、」

「その述懐は我等これで承つても詮ない事だ、今日、甚之丞殿方へ何の用事あつて來られたか、たとひ一門の縁者にせよ、私事の内談にせよ、お當お屋敷には其後の憚りあるべき筈の身、それが主人不在とて終日、悠然として居られたは如何なる儀で、いかやうの仔細で、以前は兎も角、あらためて返答せられい」

俄に威容を作りながら言葉の端より聲まで打って變へて詰れば、周左衛門さらに目色も動かさず、いよく悠々たる體、

「仰せまで無く、其後の憚りあるべき身なればこそ、終日、當年ここに二十八の男が三歳兒の如く入口の戸を閉ぢられたまゝ、神妙に罷り在りました、また甚之丞方へは前夜、途中ながら約束あつて、わざ／＼まるったもの、さるを彼、その約束を反故

として、否、かう致すべき兼ての謀計でがな、この周左衛門を置去にして、いづれへ消えさせたやら、遁け出したやら、は、かやうな水の泡沫に似た奴は儲置き、幸ひ召されましたる貴方様へ伺ひたき一儀、承れば本國に残し置きました亡父の墓碑が、御目觸のよしにて近々、御取退け遊ばさるゝとの事、こりや拙者の耳違ひかとは存じますれど、念のため」

「さては其儀に就いて内々、同苗の許へ來られたぢやな、いかにも心中お察し申して笑止千萬、氣の毒ながら致し方のない事、全く耳違ひでは御坐らぬぞ」

「まさかに大國を知ろし召す君侯の御意とも存ぜぬ事、じたい何者が口を開きましたか、その姓名を承りたい」

身は既に追放せられし浪人の取扱、その前には當時の羽を伸ばす出頭の重役、その背後には事の萬一に備へし血氣の壯士六七人、加之も五體に寸鐵を帯びざる丸腰の周左衛門、いはゞ敵の重圍に落ち込みながら、不敵の眼中さらに何物の恐るゝ體なし、

「重ねて申さずとも義ながら、凡そ紀州一國に人間一個の骨を埋めし墳墓、されはごの地所を塞いで何人の目觸りに相成りまするや、わけて父の墓は祖先以來の菩提寺、たとひ御馬前の忠死にあらずとも、武士道の端くれには漏れぬ筈の最後を遂げましたもの、また兩成敗たるべき相手方の家は一子そのまゝ、無事に相續いたして今なほ全盛と承るに、死後十餘年の父のみ何がため白骨まで發かれまするや、もとより君侯の御意とは存ぜられぬ事、そもく何者の口切か、その姓名を是非に承りたい」

「や、以前を思へばこそ無用の會釋も致す現在の今、浪人の身として舌の過ぎた事、

誰が口切にもせい、その沙汰に取極めた以上、その沙汰ぢや」

「現在の今、浪人なればこそ、もし以前の身ならば斯くまで頭を下けて言葉は盡さずともの大泉周左衛門」

「黙れ、まだ浪人の取扱ひは情のうち、あらためて言はゞ追放に處せられた刑餘の身として、御當家の沙汰に不足がましい申分、そのまゝには差置かぬぞ」

「いづれ此まゝに差置かれぬ義は固よりの覺悟、その段は如何やうとも思召の御勝手次第、但し父の墳墓は思召の御勝手次第とも成りませぬ事、こりや子としての拙者かく御不足を申し上げるばかりでない、恐れながら正しく御政道の瑕瑾、いかに天下の御三家とは申せ、あまりの御沙汰」

「何、御政道の瑕瑾とは、じたい其方、正氣で申したか」

「御念に及ばず、たとひ鐵火を頭上に浴びるとも狼狽へぬ筈の男、時に恐れ人に媚び

て鷲を鴉とは死すとも得いはぬ男、正しく御政道の瑕瑾を瑕瑾と申せば、此身そも

そも何となりまする」

「もはや事の外ぢや、それ其奴に用心さッしやい」

「聲もろとも背後に控へし六七人、忽ち前後左右を取圍めば、周左衛門、からくくと高く笑ひぬ、

「さてく入らざる御用心、この周左衛門を無用の下司活動するものと見られたか、事の叶はぬ時は血迷うた暴れ死でもするものと見られたか、は、は、は、たとひ小人原の術に落ちて無念の最後を遂ぐるとも、これが我身の運命と思はゞ見苦しき狼藉の振舞なきすべき男で無い、されど、もし萬一この周左衛門が手足を動かさば五人六人の相手、何の御用心になるべき、いづれにしても入らざる事、はッはッはッ」

泥に育ちし鰻鱺は、雖に首を刺され庖丁に腹を割られながら猶かつ身を藻掻いて遁れ出でんとし、龍門に上るべき鯉は、俎板に觀念の鱗を展べて尾緒を動かさず、魚王の鯛は死んでも頭骨眼肉を貴人の配膳に供して珍重せらる、人また叶はぬ運命の底に落ちし曉に、小人は泣いて叫び凡俗は狼狽へて狂ひ、匹夫は血迷うて喚き、ものゝ覺悟なき小勇者は無用の手足を働かせ、まことの太勇者は睡るが如く平然として終る、

緑葉の蔭深き夏の梢、いつしか空に見え透いて、はや軒端に音なき秋風、そよと吹き渡る寶永六年九月十三日、紀州家の江戸屋敷に行末の名物と唄はるべき可惜ら武夫一人を捉へて、あはれ人知れぬ朝露一滴の最後に落とし込みぬ、

その孝心に免じて父の墳墓の義は其まゝに差許し置く、但し追放に處せられし刑餘の身を以て恐れ氣もなく御政道に過言の者、これとて祖先傳來の家名を思召され格別の御取扱ひといふ嚴命の下に、大泉周左衛門、いよく切腹を仰せ付けられぬ、

加之も生涯いづこにも立ち難き浪々の身が舊恩の君家に士分の最後を賜はるぞ、武夫冥利、有難く謹んで頂戴せよとの事、もはや理も非もなし、事ここに至りては道もなし法もなし、水は逆しまに流れて人は横しまに歩む世の中、せめて父の墳墓を小人原の手に發かれざるが不思議の倅、また君寵の狂犬を斬りし其仇と言ひ渡されざるが案外の面目、今この我こゝに二十八歳の曉を斯かる無道の犠牲となるも天なり命なり、怨むほぎの奴なし憤るほぎの相手なし、絞り出すべき涙も無しと、たゞ眼を閉ぢて時刻の來るを待ち受けぬ、

されど我を足と頼みし看觀の身の上、また我を主と頼みし勘治平が身の上、いかに三人かくまで不運の縁を結びしか、その一人は獄中に繋がれて我こゝに死すとも知ら

ず、その一人は浪宅に首を伸ばして歸らぬ我を待つかと思へば、流石に観念を据ゑながら腸を斷たる、心地、士分の最後を賜はるとは只これ切腹の替言葉、そのまゝに浪人分の待遇、いづれ後は取潰すべき空長屋一軒を掃き清めて、新らしき疊一枚を敷かれたるのみ、作法の三方臺もなく白衣の死装束も無く、麻の上下を召上げられて着たるまゝの衣服、刀は我腰に横へしまゝの脇差、式を守る檢死の役人にはあらで見物の奴等十餘人、長屋の前には警固の足輕二十人、たゞ大道の路傍に坐して腹を切らぬといふばかりの體、周左衛門、おもはず物凄き眼を光らして四方を睨み廻しぬ、

「大泉周左衛門、まことの男なればこそ紀州家の幸福、第一は眼前に控へさツしやる面々の生命拾ひぢや、また名士の最後は名玉の碎かるゝと同じ事、いざ近う這ひ寄ツて拜まれい」

惜しや三十の曉に二年を餘して、落花は再び梢に咲かず、たゞ見事に腹十文字、

山を去り世に出でて我兄とも頼みし大泉周左衛門が二十八の曉、小人原の術に落ちて紀州家の空長屋にて腹十文字の最後を遂げしとは知らず、身は學文路宿の捨子と聞けるのみ東國武士某一子といふ、その某を現在の町奉行飯尾豊後守とは知らず、たゞ思はぬ不意の囚獄に投げ込まれし宥観、七日目また俄に呼び出されぬ、

今日こそは死活の境、我運命の生滅、いづれになるかと思ひながら、獄卒に曳き出されて白洲の砂利に押し据ゑられ、いつしか生え伸びし毬栗頭の額越に見上ぐれば左右の席に順を守りて居並ぶ調べ方の役人、その正面より飯尾豊後守、肩衣の襟を正せし兩手そのまゝ、袴の膝に置きつゝ、暫時の無言、じつと見下しぬ、

「もと高野山明王院の新發意宥観、當時は淺草田原町大泉周左衛門浪宅の厄介者、今日を以て許し遣はずご、もはや吟味ないご、起てい」

きくや否、宥観はツと思はず頭を上ぐれば、飯尾豊後守、はや既に座を離れて奥の方へ入らんとする後姿、宥観また思はず頭を垂れぬ、

豊後守の入りし後、下役の一人、さらに宥観を近く呼び出しぬ、

「其方が今度の事、たゞ一應は輕う見えても内實、なか／＼以て後始末に手重い儀があるぞ、さるを御奉行、ぢき／＼かく即決いたさるゝは例に無い格別の思召ぢや、有難く存ぜよ」

「は、わけて斯やうな御沙汰向には猶更ら不案内の宥観、たゞ偏に御宥免のほぎを有難く心得まする」

「もはや其方の身勝手ながら、もし疲勞いたせば暫時休息を與へた上、醫藥の手當も取らずぞ」

「途中より不意に、なくなりましたまゝ、七日目、さぞ宿許の主人も待ち兼ね居らうか

と存じますれば、一時も早く」

「市中不馴れの者、願へば送り届けて遣はずぞ」

「いや、そのお言葉だけを戴きまして、このまゝの御放免を願ひまする」

「さらば起ちませい」

「はッ」

千年の靈跡を保てる高野山の極樂に我ための地獄あり、古來幾何の人命を断ちし囚獄の地獄に我ための極樂あり、うき世の利害得失、人間の窮達消長、いづこに運命の定めあるべき、夢の如く幻の如し、

奉行所の裏門より送り出されて、籠の鳥の雲井に放たれし心地、東西の方角も確とは見定めず、そのまゝ、塀際に身を縮めて走せ行かんとすれば、折しも其處に立てる編笠の武士一人、

「こりや待て還俗坊」

おもはぬ不意に捕はれて囚獄の闇に繋がれしが、また思はぬ不意に許され、浮世の風に放たれし宥観、散るが如く身を飛ばして其まゝ走せ去らんとする背後より、こりや待て還俗坊との聲、はッと見返れば編笠に面を包みし巻羽織の武士一人、片手を宙に軽く浮べて差招きぬ、

恐ろしき禍災の餌食となりつゝ、その唇に舐められ其舌に弄ばれしが、やうく牙を免れて七日目に吐き出されし今、また囚獄の塀際を駆け放れぬ背後より正體の得しなから、膽魂は生れついでに不敵さ、靜に小腰を屈めて近寄りぬ、加之も額越の兩眼、じろりと笠のうちを差覗きぬ、

「お呼止は何の御用」

武士は編笠越に四邊を見廻しながら、わざと身を摺り寄せて聲を潜めぬ、

「幸ひ獄中は免れても、うかく油斷すな、また歸る途中いかなる變に出逢ふやら、

いはゞ執念深い浮世の外に大敵を持つた身ぢや、危いぞ」

「や、何と仰せられまする」

「元は高野山の新發意、宥観と呼ばれたものであらう」

「は」

「今は淺草の田原町に、大泉某といふ紀州家の浪人に養はれ居る身であらう」

「それまで委細に御存じの御方、いづれ様で、あらせられまする」

「ちと仔細あつて、よく知つた者ぢや、但し其身に取つて悪しうない者ぢや、兎も兎も我屋敷まで、田原町の浪宅へは別に人を遣はさうぞ」

「は、さほごまでの御意に重ねて、恐れながら、この江戸には一切の所縁なきもの、田舎生育に安堵のため、御姓名を伺ひまする」

「姓名、聞かせても始めての事、知らう筈あるまいが、屋敷は神田の小川町、高田左門といふ直参武士ぢや」

「さくや否、宥観おもはず目を圓くして首を差伸べながら、またもや笠の中を覗ふが如く覗き込み、

「もし同じ御身分、同じ御姓名の方、番町にもあられますか」

「不意に驚く武士、また思はず笠に手をかけて宥観を見下しぬ、

「その高田左門、何として知る、近ごろ番町より小川町へ引移った者ぢや」

「紀州の根來に頼覺坊と申さる、御舎弟を持たれまするか」

「や、頼覺いかにも弟、それまた何として知る」

「お供、このまゝ、御屋敷まで、たゞお供いたしまする」

「こりや不思議、委細は後ぢや、あの辻に駕を待たせて置いたぞ、急げ」

「はッ、はッ」

兼て知る宥観が放免の時刻を囚獄の裏門に待ち受け、用意の辻駕に乘せて自己の駕もろとも、飛ぶが如くに小川町の屋敷へ立歸りし高田左門、そつと奥の一室に呼び入れながら語れば語るほご思はぬ由縁の糸を引合うて、聞けば聞くほご不思議の縁の搦み合に今更の小膝を打ちぬ、

「神ならぬ身とは、よくいうた世の諺、かうまでの重ね合うた縁とは知らいでや、偕も不思議ぢや」

「その不思議に付きまして、父が事、只今御存じのやうに仰せられました東國武士の

某、私のためには學文路宿の捨親、いづこに何と申して、暮し居りまするか、十六の今日まで、この世の中に、親は無いものと心得、あきらめて、たゞ捨子のまゝに育ちました身、わけて戀しう、なつかしう存じまする」

宥觀、おもはず兩眼の溜め涙、ほろくと膝に落せば、高田左門も俄に顔を反けて聲を潤ましぬ、

「さもあらう筈、なれど今、暫時の間は只この高田左門が餘所ながら、その捨親を知るといふだけの事で得心せい、これも其親のため、また其身のためぢや、但し下司の種では無いぞ、東國武士の某も某、正しく歴とした何の某、時機を見て逢はずぞよ、まづそれまでは知らぬ昔、きかぬ昔と思つて居よ」

「は」

「その捨親に餘所ながら頼まれたばかりか、きけば案外、また我肉身の弟、あの頼

覺房にも、さほごの因縁あるものとは、いよく以て重ね重ねの事」

「佛界にも在家にも、かやうに立寄る木蔭の薄い身、たゞ此後の御力、偏に頼み上げまする」

「心得た、及ばずながら高田左門、めでたう父子の對面さすまでは其、その捨親になり代つて萬事の介抱するぞ」

「は」

「但し相手が高野一山の執着、不意の横飛沫に吹き暴れて、關東の總別當たる此江戸の白金まで手を伸ばした上は、たとひ一旦、町奉行の吟味を免れても油斷のならぬ大敵ぢや、さるを大泉周左衛門とやら、されほどの分別ある人かは知らず、御三方を追放せられた浪々といへば世間に向うて埋れ木の身、萬一の盾には覺束ないぞ、まして高野山は古來別格の地頭分にもせよ國は紀州家の配下同然、猶更ら以ての事、

立ちよ おほき
立寄る大木の下で無くとも幸ひ天下の直參と呼べる、高田左門は田原町の浪宅より
も聊か手丈夫の筈、せめて半年か一年の間、そつと敵の汐合も見定め、また其頭が
生え伸びて結髪の男になるまで」

「かすくの思召、身に餘つて、生涯の御恩と心得まする、つきましては猶更ら一時
も早う、田原町の浪宅へ、この儀を」

「いや、念に及ばず先刻、はや人を遣はして事の大略を知らせて置いた、今にも大泉
とやら来るべき筈、其上また委しう語らうぞ」

「は」

「さて僅の間ながら不意の獄中に嘸、身の疲勞もあらう、始めての他人と思はず萬事
うち寛いで、食事も沐浴も心次第ぢやが、まづ五體を横にして、は、は、は、いかや
うな無理でも聞くぞよ、こりや昔の夢に捨てた父の義理名代ぢや、は、は、は、」

たとひ一時の悪戯にもせよ、千古清淨の靈跡に七日尻溜の糞を積み上げて一山を驚か
したる宥観、よしや師の恩に引かれ頼覺房が助力あるにせよ、抛け殺さるべき最勝會
の相撲に蝗の如く飛び出して六尺の大敵を蹴倒したる宥観、また思はぬ不意に召捕ら
れ獄中に繋がれても、免れぬ運命の末かくと思へば觀念の胴骨を据ゑて神色自若たり
しほぎの宥観、

されど身は鐵石にあらず、今年やうく十六の還俗坊主、加之も始めて浮世に這ひ出
せし首途の禍難、生來いまだ耳目に觸れざる放火夜盜の惡漢無頼に肩を押詰められ膝
を組み敷かれて、我知らず五體の疲勞ありし上、また思はぬ高田左門が不思議の縁の
情に心弛みしのみか、奥深き閑室に自己たゞ一人、四邊に人なく臥房を設けられて薄
闇き屏風のうちに身を横たへつゝ、ほつと打寛いで此ほぎより胸に蟠りし大息を吹け

ば、何とやら皮肉の溶けし心地、いつしか自然に氣は煙に消え行くが如く、茫として夢うつゝに睡り入りぬ、

石佛を横に倒せし體ながら、たゞ鼾の聲に死人とも見えざりし宥観、ふと我にかへりて目を見開けば、今しも睡りしとのみ思ひの外、はや半日を夢中に過して夜に入りし我枕頭へ、屏風の小蔭より燈火の餘光ばつと漏れ來りぬ、

さては疲れ果て、平生の我を失うたり、加之も始めて逢ひし情の宿に、わけて田原町の浪宅より走せ來る筈の人を待つ身が、かく前後を打ち忘れて濟むべきかと、おもはず首を擡けつゝ、靜に見廻せば、をりしも隔壁の襖を細目に開けて差覗く人影、

「今日は晝も夜もないと思うたに、はや目が覺めたか」

入り來りしは主人の左門、宥観それと見るや否、起き直つて俄に容を正しぬ、

「無作法もの、うかと我知らず、かやうな體を御覽に入れまして」

「いや、氣心の確なればこそ、もし弱くば、五體を損じて病み煩ふ筈のところ、さるを僅半日の一睡に取返した其、その顔色、いかにも自然の逸物ぢや」

「これは只、幼少より山の頂を獸のやうに馳せ廻つて、寺門の惡戯者に育ちました身の一徳、いはゞ浮世の外で十六年、我まゝの出養生いたしましたも同じ事、はゝゝゝ」

「おもしろい、はゝゝゝその一言は面白いが楮、あの田原町の浪宅に、ちと面白からぬ事のあるやうぢや」

「や、そりや如何やうな儀で」

「先刻、人を遣はした使者と共に勘治平とやら留守居の下郎が馳せ參つて居る、委細は其者より、但し我等きくところは、大泉周左衛門、三日以前、紀州家へ出向いたまゝとの事、追放に處せられた身が三日そのまゝ、其屋敷に居らう筈は無し、また無事ならば歸るべき筈、歸らずば音便あるべき筈、これや尋常事で無いぞ、兎も角も

勘治平これへ呼び入れて、なほ委しう聞いた上の事、始めての我等へは、遠慮もあらう」

眉うち擧めて語りながら、振り返りて俄に手を鳴らせば、宥観おもはず死毒を舐めし如き面に目鼻を寄せつゝ、的なき天井の片隅を苦しげに睨みあけぬ、

身は六尺を越えて山門の荒仁王に等しく、力は十人に餘りて世間いづこの里にも敵なけれぎ、都の空に遠き紀州の果の片田舎に育ちし勘治平、その名倉村に性質の心より自己が正直を差引けば、あはれや残る浮世の分別に足らぬ勝の男、主人の高田左門に呼び入れられて、宥観の顔を見るや否、はや胸に迫りて物も得いはれぬ盤大面に兩眼の涙

宥観また我を忘れし小膝を進めて、おもはず握り固めし拳を迂らしながら、待ち兼ね

し首を差出しぬ、

「此身が不意に召捕られた災難、今日また不意に許された上、かやうに御當家に引取られた仔細、それは委しう後で語らうが儘、大泉殿、三日以前、紀州家の屋敷へ行かれたまゝとの事、じたい何のために行かれたか、せめて行かるゝ時、餘所ながら言ひ置かれた儀は無いか、ふしぎの御縁で行末の御力添を下さる御當家ぢや、御免を蒙つて萬事ありのまゝ、知るだけの事うちあけて」

たゝみかけて問はるゝ言葉に勘治平、猶更六尺の大兵を小兒の如く居縮めながら、差俯いての濕み聲、

「何の御用とも仰せられず、たゞ四日以前の夜に入つて後、いづれよりか歸られて、やれ宥観の行方が案外の異な事から知れたぞ、まづ一安心との御言葉、偕その曉方、加之も食事さへなされず、そのまゝの無言に凡そ一町ばかりも出られたかと思へば、

ふと立歸られて、こりや勘治平、紀州家に居る親類の端で、同苗甚之丞といふ者の方へ行くぞとの御一言、その外に言ひ置かれた事も、また御音信も無い三日以來、あの浪宅で、この大男奴たゞ一人、何として居られまする、幸ひ今戸橋の庄五郎とて江戸の市中で男家業の伊達者とやら、これも最初は貴方の行方を探さうため、その名を聞き及んで頼みました折柄、まだ駈け込んで泣き付いたもの、儲、御三家方だけは我等の手も足も届かぬとの事」

ことし十六の身ながら、かくと聞きし今は却つて五體の骨節を膽魂に繋ぎ合せし如き宥観さらに顔色も變へず、たゞ靜に無言のまゝ、勘治平の方へ首肯きつゝ、あらためて主人の高田左門へ問ひぬ、

「只今この者が申しまするだけの次第、また聞くだけの外には、何の思案も工夫も及びませぬ、たゞ只管思召のほぎを伺ひまする、周左衛門こと、同苗甚之丞方への私

用は兎も角も、およそ御三家方には一旦、追放したものを見付けし砌、如何やうの

御取扱ひに相成りまするやら」

高田左門、おもはず組みし腕を解いて、暫し小首を傾けぬ、

「む、四日前の夜、案外の異な事から宥観の行方が知れたと申したな、その上まづ一安心と申したな、む、四日以前の夜、いかにも、こりや案外の異な事で知りもせうが儲その曉方、紀州家へ出向いたまゝ、三日以來、はてな、勿論、天下の御三家といへば萬事の格合、なみくの大名衆と違うて其時その場の成行次第、いかなる不意の扱ひせらるゝかは知らず、親類の同苗方へ一身の私用で忍び参つたもの、よし重役の目に付いても言葉さへ交さずば知らぬ分で濟む筈の例、加之も本國で追放の身を、わざくこの江戸屋敷で事あたらしく召捕る程の儀は、なれど其ま、歸らぬが不審の第一、わけて同苗甚之丞といふもの、方より何とか内通のあるべきが、今日まで

絶えて其まゝとは、あまりの奇怪」

主人も宥観も其後口には言はず、たゞ眉を擧めて心に不安の念を抱けば、勘治平、そつと額越に雙方の顔色を窺うて猶更打情れぬ、

紀州家の上屋敷、重役の方に御意を得たしとて、わざと只一僕を召連れたる手輕の身ながら高田左門、わけて慇懃の會釋中に陪臣ならざる格式を立て、ずつと眞正面より申し込みぬ、

天下三家の知行高より見れば馬草料にも足らぬ僅の二千石なれど、同じ天下の直參衆といへば我まゝの家風に吹き落されぬ筈の客分、書院の間に導いて給仕の諸士に茶菓を運ばせし後、やがて立出でしは此奴、ふしぎにも大泉周左衛門を無理往生の詰腹させし近來の出頭人、

互に初對面の挨拶も濟みし後、高田左門、肩衣の襟もろとも袴の折目を正しながら流石は事に馴れし老功、言葉は却つて圓く滑かに微笑を含みぬ、

「實は内々、そつと伺ひたき私事のため、此邊を御含みの上、身勝手ながら、ひらに打解けての御對談」

「これは御挨拶、さて御用の儀は」

「御當家、御家來衆のうち大泉甚之丞と申さるゝ御人、あられまするか」

「いかにも、大泉甚之丞、まかり居りまする」

「その大泉殿方へ三日以前、元來こりや親類のよし、同苗周左衛門といふもの參つたまゝ、いまだ浪宅へ立歸らぬとの事に付きましたて」

「や、左様の儀は萬々ない筈のもの、その大泉周左衛門、もと甚之丞と同じ當家の御家來筋なれど、罪あつて本國を追放せられたまゝ、當時いづれに忍び居るか、とんと

其後の事は、第一また當屋敷内に一夜たりとも他よりの宿泊無用の掟

「たしかに、さうと聞き及んで、わざと甚之丞殿方へは向はず、不意の推參ながら斯く重役筋へ伺うた甲斐も無う、さてく無念千萬」

「異な御言葉、御無念とは其、その周左衛門に、いかやうの御用ばしありましてか」

「御人品を見掛けて打明けまするぞ、我等ちと其周左衛門に面目の立たざる意恨あつて、日夜、頻りと探しまはる折柄、勿論、元は御當家の御家來衆とは存じながら、只今では召放され浪人者、おのれ見付け次第と心得まして」

語りながら高田左門、じろりと偷み目に見れば、果して心に覺えありけの顔色、何とやら思案の後、そつと膝を進めぬ、

「この不肖な手前どもへ歴々の御直參として、そこまで打明けらる、御言葉に對し、内々ながら漏らしますれば、その周左衛門、いかにも當屋敷の同苗甚之丞方へ三日

以前

「む、忍び居りまするか」

「いや、實は甚之丞、ふと途中にて出逢うたを幸ひ、兼て重役ごもよりの申付け縁類の好意に呼び寄せた上、空長屋に押込めて、詰腹きらせました」

「南無三、死なしたかつ」

「御心外とは存じまするが、當家に於ても彼は只、本國追放のまゝには差置けぬもの、其後の儀に付いて居所評議の折柄、幸ひ捕へての始末で」

「もと御當家のもので、加之も猶更ら追放の後に差許せぬ儀とあれば、身勝手の我等が一分で打果さうよりは、彼奴本人に取つての死場所ながら、じたい如何やうの次第で詰腹となりましたか、せめての念晴らしに事の大略を」

自己まづ敵の懐中に入りて、我手に打ち漏せし如き無念の顔色を現はしながら、高田

左門こゝぞと問ひ詰めぬ、

敵の聲を聞かんとすれば敵の影に立添へとの諺、高田左門、おのれ大泉周左衛門に人知れぬ怨恨あつて追ひ込みしが如く、紀州家の重役が口より内々そつと詰腹の仔細を聞き出しぬ、

その父は武士道の意地に馳せ過ぎて相傳の食祿を削られ、その身は君寵の狂犬を斬つて故郷の家門を追はれ、加之も紀見峠の俠骨に勘治平を説き伏せし事、三日市の宿に只一夜の友ながら十年の知己に等しく我弟の頼覺房と語りし事まで、委細を宥観より聞き及ぶのみか、始めて逢ひし僅に宵の一刻なれど、多年その道に得たる飯尾豊後守も天晴れ男振と小膝を打ちて我に語りしほぎの人品骨柄、わけて無理往生の詰腹さらせし紀州家の重役さへ舌を捲いて其最後の不敵さに驚きし事を思へば、行末の花も咲

かさす可憐ら二十八を一期の嵐に散りし周左衛門、いかに其身の不運を観念せしかと、一目も見ざる高田左門も、いと猶更玉を碎きし心地して、おもはず涙を浮かべぬ、まして元來これほぎの武夫を、よしや其分に捨て置き難き仔細ありとも、無慙や平生は人も通はぬ塵塚の空長屋に押込めて、いはゞ大道の路傍に等しき詰腹を切らせしとは、そもく天下三流の大家にあるまじき無法の沙汰、して其口裏を聞けば卑怯にも欺いて落とし坑に突き入れしが如き體、第一に言語道斷の曲者は同苗甚之丞といふ奴、おのれ親類縁者の端くれに身を置きながら、おもはぬ不意の途中に出逢ひし事、いはず語らずば其のまゝ、濟むべき筈の情を、わざく呼子笛の綱手となつて重役の出頭面に媚び諂ひしとは、此奴、埋み火に蒸し殺しても飽き足らぬ人面の畜類ぞと、高田左門、また一目も見ざる奴ながら、我が仇敵の心地して憤怒の齒を噛み鳴らしぬ、きけば聞くほぎ當世無類の逸物、あたら武士を世に埋れ木のまゝ、加之も犬猫に等しく

空長屋の床板に殺せし紀州家の振舞、おもへば思ふほご残忍非道の曲者、おのれ同族一門の血肉を喰ひ取ツて賞翫の舌鼓を打ちし甚之丞め、好機あらば周左衛門への手向草に生面の皮を剥いでくれん、また奥深き主人の殿には及ばずとも、せめて事に當りし紀州家の重役ごもに一泡吹かしてくれんぞと、高田左門、人知れぬ無念の腸を絞つて立歸りぬ、

されぎ以上の仔細うちあけて具に語れば、今年やうく十六の還俗坊主ながら宥觀の面魂、とても其まゝ無事の耳には入れ置かぬ筈、さりとして語らざば猶更の勢ひ、ただ紀州家の同苗甚之丞と聞き及ぶ的を覘うて如何なる事を仕出來すやら知れぬものと、一室に呼び入れつゝ其顔色を窺ひながら周左衛門の最後を告げぬ、かくと聞きし宥觀、はつと思はず身を驚かして怨恨の眦を裂き拳を握るかと思れば、默然として木像に等しく五體の端も動かさず、たゞ専念に差俯いて聲を濕ませなが

ら、

「南無阿彌陀佛」

大泉周左衛門、あたらし名木の花も咲かで二十八の生涯、いよく紀州家の小人原に謀られて人知れぬ空長屋に無念の最後を遂げしと聞くと、宥觀おもはず差俯いて一遍の念佛を唱へしのみ、其後は朝夕たゞ默然として奥の一室に閉ぢ籠りながら、おのが獄中の疲れも忘れ果て、寐もやらぬ體、加之も夜更けて漏るゝ燈火の影より主人の高田左門、そつと窺へば、寂寞たる燈下に専念の容を正して無言の讀經、猶更ら哀れ深く物凄し、宥觀がための兄となり勘治平がために主となりし大泉周左衛門いよく死せし後は、もはや田原町の浪宅あのみま、置くべき用なし、加之も倒せし大木の後に残る芽生のお

るを知れば、紀州家より禍の斧、何時また不意に飛び来るやら、わけて高野一山の内意を受けし白金の別當も思はぬ案外の出獄放免に不審の眉を擧めつ、猶更ら嫉妬執着の折柄、いづれにしても油斷大敵なりと、高田左門、腹心の家來を馳せて一夜のうちに其浪宅を取片附けぬ、

もとより浮世を忍ぶ假の宿、まして日も浅き浪宅の佗住居、江戸全盛の華奢を見習ふべき身ならねば、やうく三人こゝに男世帯の鍋釜あるのみ、

されど周左衛門が着替を入れたる古葛籠の底に姫路革の大財布ありて、その口を開けば目を射るばかりに光り輝く大判小判とりませて五百餘兩、別に油紙に包める先祖傳來の系圖一卷、藩祖南龍公より祖父が初陣の戦功に賜はりし感狀もろとも黄金裝飾の匕首一口、幾重の奉書紙を揉み和らけて巻き込みし亡父の位牌と亡母が形見の笄、平生その身に帯びし兩刀の折紙、大は大兼光、小は福岡一文字、

高田左門、いちく手に取上げて兩眼の涙を含みながら、世の諺にいふ名木の落葉とやら、これぞ主なき死後に氏素性を物語るべき品々、中にも哀れ其身の生涯を埋れ木のまゝと思へばこそ、見苦しからぬ浪々の行末を保たんとて斯くまで人知れず金銀の用意せしは流石に覺悟ある男、惜しや天晴れ逸物を狗鼠の餌食にして退けたりと、また今更の心地に泣きぬ、

以上の品々、以上の金子、偕これを誰に譲らん家も無く妻子も無く、紀州家にあるべき一門の縁者も、あの同苗甚之丞めが非道を見遁す上は其他いづれも同じ穴の奴原、わけて亡人の心に叶ふまじ、さりとて宥観も勘治平も元は血筋の縁なき他人の身、とても受くべき筈なし、

さらば先づ我菩提所へ石碑を建立して追善供養の外は、一切これを我手に預かり置いて後日の工夫、紀州家の重役ごもに一泡吹かさん時の用ありと、高田左門また人知れ

ず閑室に腕を拱いて思案の小首を捻りぬ、

「我も持ったが病の男一貫、おのれやれ、この形見の品に何と物いはしてやらう」

浅草田原町の浪宅を取片付けし後は、宥観もろとも勘治平も高田左門の情の宿に引取られて、人知れず無念の涙を呑みながら、内々そつと紀州家の方角を睨みつゝ、また高野一山の執着いかに白金の別當より吠え立つるかと窺ひぬ、

一夜、奥の方に俄の客來ありと聞いて宥観は猶更ら一室に深く閉ぢ籠りながら、聲を潜めて勘治平との物語、

「武家に用の無い十六の還俗坊主と、晴れ晴れしい座敷の上に不似合の大男が、かう二人とも、たゞ手を束ねて御當家の厄介となるは心苦しい事、さて何とか身に應じた御用あるまいかな」

「いや、まだ貴方は世にいふ長袖に育った身、此後ごのやうな御用に立たうも知れず、この勘治平こそ、草深い片田舎で三十二の今日まで丸裸の毛脛を飛ばして駆け育った奴、また何を見習うても元來の無器用もの、勿體ない只お情に預かるばかりで、とても御恩の返せる身では無し、第一は生涯お主と頼んだ行末の杖柱を失うて、もはや此江戸に何の希望も娛樂も無い身、あたり御當家の疊敷を塞いで穀潰しのまゝで終らうよりは、瓜の蔓は土氣を離れぬ諺、今のうち生れ故郷の空へ立歸つて、また元の水香百姓が分相應の業かと存じまする」

「や、さういへば此身も同じ事、生涯の兄とも思つた其人を俄の不意に取失うて、こども不思議の縁は縁ながら、本街道の木蔭を放れて岐路に雨宿りする心地、なれど折角の思召を無にして此まゝ飛び出しても、馴れぬ浮世に方角さへ知れぬ身が、さて何となるものぞ、まして何時、また何處から思はぬ禍の旋風に吹き攫はるゝやら

油斷大敵の折柄ぢや

「そりや浮世の雨にも風にも規はるゝほごの利發に生れた貴方様の事、五體は世間の人竝に勝れて居ても、儲これといふ時には結句あるより無いが優勝の勘治平、このまゝ、うろく狼狽へて、お手足纏ひにならうよりは、ごうでも今のうち元の藁小屋に歸りたう御坐りまする」

「よくくゝの縁あればこそ、互に無縁の他人が今日こゝまで、この江戸の空まで伴うて來たものゝ、その縁を結び付けた元柱の無い今更、歸るといふを引止める力の無い身ぢや、但し一應は御當家の思召も聞いた上の事」

きけば無理ならねぎ流石に下郎は下郎、高が凡夫より外に取得の無い男、なるほご此のまゝ、心の進まぬ江戸の空に引止めて無用の行末を見るよりも、今のうち送り歸して生れ故郷の片田舎に無事に老後を遂げしめんと、宥観おもはず首肯しながら、さて何

とやら油に水の交りし心地、

折しも此方の襖を押開いて、當家の召使ひが慇懃の口上振

「宥観様、そのまゝで宜しいとの事、主人より只今、お客席へ召しまする、いざ御案内」

わけて其後は世間を憚りて、奥深き一室に忍ぶ身、また忍ばさるゝ身、さるを今、俄に主人より客席への案内、宥観おもはず眉を擧めながら導かれて書院座敷の此方より窺へば、燈火を中間に隔て、何とやら主客うち解けし懇談の體、宥観その座に進み出でて、流石に幼少より馴れし寺門の生育、慇懃に禮を正しながら身の角も立たず頭を下けぬ、

「は、召しました宥観」

主人の高田左門、満面の微笑もろとも靜に振り返りての聲、

「これは別して我等が入魂の御人ぢや、此後また如何やうの御世話にならうも知れぬ、その心得で御挨拶せい」

主人の言葉に宥観、始めて頭をあけつゝ燈火の影を見れば、や、我ために地獄の生佛と思ひし町奉行その人、

「いづれ様かと存じましたに、は、其節の御恩、有難く御禮を申し上げまする」

飯尾豊後守、暫く無言のまゝ膝を向け直して宥観の顔、じつと打守りながら、思はず聲は濕り勝なり、

「あの節の事は一切、公儀役目の上、こゝでは飯尾作左衛門といふ、當家の年久しい友達ぢや、近う、會釋も遠慮も入らぬ事、近う寄つて、萬事、さ、うち解けて隔意なく語らうぞ」

「恐れ入りまする、宥観、身分の儀は、あらためて申し上げずとも、御存じあらせらるゝ事、只今は、ふしぎの御縁で、かく御當家のお扶助を蒙り居りまする」

「その事は、委しう主人殿より聞いたぞ、さて人といふものは、ごこに、いかなる縁のあらうものやら、猶この末、お頼み申すが身のためぢや」

「は」

「時に淺草田原町の宿許、その浪人衆も思はぬ無念の儀で、亡き數に入られたとの事、重ねぐの不運に逢うて嘸、取残された身は猶更ら心細くもあらうが、これも定まる其人の運命ならば致方なく、詮方の無い次第ぢや」

「兄とも、父とも、存じましたるもの、只お察しを願ひあけまする」

「いかにも、察し入る、但し其人の最後に就いての事、きけば紀州家に同苗甚之丞といふ者のあるよし、後日、もし其奴に出逢はゞ何とする、さらに包まず憚らず心體

を申して見い

「は、外ならぬ御兩所様の前、宥観、心體ありのまゝに申し上げますれば、其奴いつといふ限りの無い自然の後日、もし出逢うた時との御言葉を、待ち遠く心得まする」

「む、時も待たず、おしかけて無念を霽らす氣か」

「こゝ三年のうちには必ず、兄に致した周左衛門の手向草に、其奴の根も葉も掘り返して撈り取りまする覺悟、後日、もし自然に出逢うた時の的は、恐れながら別段、

また其外に」

「や、其的は」

「もし萬一、ならば今生最後の大悪戯に兩の肩へ、天下の御三家その紀州様と千年の名跡あの高野山を荷うて、一振、ふツて見たく存じまする」

きくや否、主人も豊後守も思はず互の顔を見合せて、そのまゝ、目を等しく宥観の面に

注ぎぬ、

主人の高田左門、ふと廁へ行く體に其まゝ、其座を立去れば、あとに残りしは飯尾豊後守と宥観との二人、

うまれて二歳の曉、高野山の麓、學文路宿に捨てられし宥観、その時の腰札に付けられし東國武士の某こそ眼前の飯尾豊後守、これが我父と知らず、たゞ奉行所といひ今また此處に情の數々、言葉の端々、しみじみと何とやら身に染み渡りぬ、

豊後守、たゞ默然として燈火の光を見詰めしが、いつしか兩眼の睫毛に含む涙の雫、流れて頬に傳ふや否、俄に堪へ兼ねて振り返りぬ、

「こりや、汝は親に逢ひたいか」

宥観、おもはず豊後守の面體、じツと打ち見上げぬ、

「何と、仰せられまする」

はや豊後守、聲まで濡れて濕りぬ、

「鳥獸さへ親子抱き合ふ情愛の中に、人間の親として、自己が生んだ子を、やうく二歳の乳香兒を知らぬ他國の山里に捨てるほどの、その無慈悲な父でも、今もし無事に居れば、逢ひたく思ふか」

宥観、我を忘れて摺り寄る膝、

「捨てられても、子で御坐りまする、捨て、も親で御坐りまする、もし、萬一もし無事に居らるゝならば宥観、宥観の父に相違、御坐りませぬ、その父、逢ひたく思ひまする」

豊後守、おもはず宥観の両手、しかと握りて引寄せぬ、

「こりや、よく見い、その、其父は、我ぢや」

宥観、とられし両手に心も無く、たゞ豊後守の顔、茫として打守りながらの一聲、

「父、父上ッ」

「よく、よく十六の今日まで、怪我も無く育った」

「宥観、母上は御坐りまするか」

「許せよ、その母は、母は汝を生んだ時、産後の病氣で」

「お名は、何と申しまする、お年は、お生家は」

「それ、この父に言はしてくれな、當家の主人が委しく知る筈ぢや」

「されば母上の事、措きまして、御不足を申し上げるでは無けれご、父上ほどの御身分が何のため、宥観を捨子になされました」

「昔の夢、それも萬事、當家の主人に聞いてくれよ、たゞ汝の父ぢや、汝は我子ぢやぞ、なれご今、暫時は此まゝ、當家に預けて置かねばならぬ仔細ある、それまでの

問 人には言ふな、互の身のためぢや」

うまれて十六の今日まで、東國武士某一子といふ七字の外、たゞ高野山の麓、學文路の宿の朝露に消えざりしを果敢なき身の幸福として、父は如何なる人やら、母は何處の何者やら夢にも通はねば年にも似ざる寢覺勝の枕を欬て、人知れぬ涙の春秋、わけて山を追はれ世に出でし甲斐も無く、行末の生涯を頼みし其人には死に別れ、ふしぎの縁に情の宿に引取られながら影さへ薄く忍ぶ身は猶更ら心淋しき此頃の憂節に、おもひきや今ぞ始めて我血をうけし生みの親に逢はんとは、

夢か、うつゝか、否、これぞ正しく我父と、見上ぐる兩眼の涙、ほろ／＼と滾しながら三歳兒の如く抱き付けば、天下の決斷所に瞳を据ゑて一言の下に黑白邪正を喝破する飯尾豊後守も、今は只これ恩愛の情に丸潰れの盲目阿爺、男泣きの聲を呑んで總

身の力に宥觀を抱き占めぬ、

「親は無くとも子は育つ諺、十六年の間、よく無事に居つた、何事も昔の夢ぢや、捨てた罪は許せよ、さる代りには此父、汝を産んで死んだ母への申譯、今は別に屋敷の妻子ありとも、汝のためには一身を賭けて護るぞよ」

「勿體ない事、たゞ父ぢや、汝は我子ぢやぞと仰せられました其、その御一言で、亡き母上も嘸、この宥觀も有難く、得心いたしまする、いづれ只今の御身分、お屋敷に、別の母様も、また見ぬ同胞もあらう筈と存じて居りまする、なれど父上、この宥觀を子と思召さば、あらためて、せめて、父上より名を、宥觀とは學文路宿の捨子を拾はれました山上得度の法名、還俗の名を願ひまする」

「やれ、いじらしい事いふぞ、不愍な奴ぢや」

「父子、めぐり逢ひました證據に、今、只今、後と仰せられず、この手を放さぬうち、

名を下さりませ」

「さてく、ごこまで不運に生れ居ったか、正しく汝こそ我飯尾家の嫡子ぢやに、や、

あはれな事して退けたぞ」

「今日の御身分で無い昔に、捨てられました身、さらく御家門の嫡子とは存じませ

ぬ、たゞ父上の口より相違ない種の實に、名を下さりませ」

「む、其一言で昔の我過失も無い飯尾家の無事満足、よく言うてくれた、なれど、そ

れほご事を分けての分別あるもの、汝に遠慮あるだけ猶更ら以て父は行末の如才な

いぞ、如何にも父子對面の證據ぢや思案に及ばぬ、この父が幼名そのまゝ」

「は、何と申しまする」

「飯尾小太郎」

流石に天下の三家といはる、紀州家、人なき筈は無けれど、小人たまくと時を得顔に
悪木の花咲く全盛、あはれ大泉周左衛門が無念の最後は徒らに血迷うたる犬死の如く
傳へられ、本國追放の身を以て人知れず江戸屋敷へ入り込みし曲者との言下に打ち消
されて、その後の是非も無く曲直を分つべき沙汰も無し、

されば自己が本家筋の血肉を削り取つて喰ひし同苗甚之丞も、たゞ心あるもの、風上
に置かれざるのみ、類を以て寄り合ふ同じ徒輩の目には何の非道も不思議もなく、却
つて時の出頭人より大義は親を滅する古語の如くに譽められぬ、

稲は稔りて頭を垂れ雑草は伸びて反り返る世の諺、いかな文盲の田夫野人も恥ぢて仕
得ざる卑怯の振舞を、大泉甚之丞その身は満足の面相を備へたる武士の一分として、
白日青天の下に結句の手柄顔を振り上げつゝ、歩むのみか、周左衛門が死後の兩刀こそ
我一門傳來の名物なりとて、その大の大兼光を時の出頭人に差出し、その小の福岡一

文字を自己の腰に帯びて、おもはぬ不意の得物に舌鼓を打ちぬ、その甚之丞が許へ近來の新參に召抱へし下郎の林平といへるもの、きけば同じ本國の百姓、六年の汗水を貯へて生涯の語り草にと江戸見物の折柄、おもひの外の繁華に氣を取られしのみか、旅の空に生命と頼む胴巻までも抜き取られて、歸るに歸れぬ立往生の身を大川へ投げんとせし曉、扶はれしは幸ひ諸家方へ人足の口入家業、その親分の今戸橋庄五郎が手より來りしとの事なれど、實は名倉の勘治平、もはや江戸にある甲斐なしと、さまざまに引止められし宥觀にも高田左門にも我から身の暇を乞うて、おめく故郷の空へ立歸りし筈の勘治平、そつと人知れず甚之丞が許に忍び入りて名を變へつゝ、下種ながらも顔色に出さず無念の腸を絞る夜晝、おのれやれ、人斬庖丁を振り廻す業は知らずとも寸隙さへあらば覺悟の相撲に取つて押へて組み伏せ、六尺總身の力に咽喉笛を絞め殺しくれんとの一念、

かくとは夢にも知らぬ甚之丞、新參ながら同じ本國の百姓といひ、第一は市中の繁華に見惚れて自己が胴巻まで抜き取らるゝほごの奴と、その愚直の體に心を許せしのみか、見れば荒仁王の如き大兵肥滿の巨漢、諺にいふ底知らずの白痴力も嘸やと思ひ、草履取に召連れても風俗さへ仕立てなば天晴れの伊達奴、加之も三年目に御歸國の御供さへ叶へば給金も入らぬとの無慾さに、これも案外の拾ひ物、おもはぬ不意の得物と、またもや舌鼓を打ちぬ、勘治平の林平、この體を見濟まして、舌鼓の返報に音なき赤い舌、ぺろりと出しぬ、うぬ畜類め、ごうするか待つて居れ、

本國の我居屋敷とは違ひ江戸勤番の長屋住居、八百石の上士ながら三室の外は臺所と十坪に足らぬ圍ひ庭、加之も三年交代の江戸詰に妻子眷族を携へねば、大泉甚之丞

たゞ二人の若黨と下郎一人の男世帯、それに近來めし抱へし林平を加へて、以上こゝに主従四人、

わけて今日は勤務非番の氣樂さ、秋なれど十月の小春日和に寒からぬ夕暮、縁端の障子を明け放ちて、晩酌の微醉に何心なく見れば、やうく十坪に足らざる庭の樹間に例の林平、六尺の大兵を縮めながら兩の手に空を擱んで藻搔くが如き體、

「林平、こりや林平」

はツと答へて振り返るや否、おもはぬ小枝に面を刺されて目鼻を皺めながら、そのままでの中腰に茂れる木葉の隙間より差出せし盤大面、みれば蜘蛛の巢に閉ぢられて猶更ら呵しく、甚之丞からくと高く打笑ひぬ、

「林平、もう捨て置き、わづか三年の勤番住居ぢや、されほご手を入れても世話甲斐の築山泉水のあるで無し、たゞ家の息ぬきに空けた掃庭ぢや、は、は、は、」

「それに致しませ、かう樹木に蜘蛛の巢を張り出しましては、第一この下郎め、山里の片田舎で地獄の鬼と擱み合ふほごに膏汗を流して働き馴れました五體が、あまり俄の極樂さに却つて氣骨が痛みまする、もし御目障りとあれば今日は此ま、また御出勤の時」

「冥加のよい奴、この後は隨分、目をかけて取らずぞ、また行々は御家の足輕か、身の若黨分にも取立て、やるぞよ」

「や、何と仰せられまする、かやうな土臭い奴が、もし萬一お國元へ御供の節さやうの身分になりますれば、それこそ村中の出世頭、まづ寺の和尚と名主庄屋を退けてこの下郎奴が第一の男と唄はれまする次第」

「は、面白い事いふ奴、さうぢや林平、其方が生れた片田舎の瘦村で第一の男と唄はれる前稽古に、この花の大江戸で日本一の大門口を唄はれて通る全盛男があるぞ、

其方の身にあやかると、その華奢振を見せて遣はさうか」

「此お江戸で日本一の大門口とは、承るだけでも嘸やと存じまする、ごこに御坐りま
するやら、かやうな卑しい身で、御奉公冥加、もし御供が叶ひますれば」

「その大門口は見た上の事ながら、唄はれて通る全盛男は林平、他でも無い、この身
ぢや、幸ひ今夜は此ほごより我を待兼山の杜鵑、久しぶりの啼音一聲、ごりや聴き
に行かうぞ、は、は、は、林平そつと供せい」

「はッ」

利慾非道の表に抜目なき小人の常も、人知れぬ戀の裏道には内々の大穴ありて遠き本
國に妻子を取残せしま、三年の江戸勤番に獨り寝の身を保つべき筈なく、白晝の
こそ武士の面目お錠口を漏れ來る奥女中の白粉氣にさへ鼻持ならぬ面を鋤めながら、

まツくら闇の夜は魂魄脱殻の五體、そつと門番に袖の下を通して屋敷を這ひ出すや
否、さす敵の女も女、金ゆゑ靡く賣色の巷を覗いて脇目も觸らぬ驀地、

わけて大泉甚之丞は何事にも表裏の曲者、晝は人に對うて女禁制の鐵兜を振り立つれ
ぎ夜は絲目の切れし戀の奴風、ごこまで白痴の風に飛び去るやら、ふはくと宙に身
を浮かせて心も上の空となりつゝ、そのころ吉原に全盛の遊女、名は松葉屋の藏人とい
ふ身代潰しの名譽、男殺しの本尊が許へ通ひ詰めぬ、加之も萬人一様の色香に自己た
だ一人が微笑を含んで古歌の情に似たる風情、我を待宵の藏人とは此奴、この道ばか
りは案外の善人、

まして我ための油斷大敵、不意に飛び付いて首を捻ぢ切らんとする勘治平とは知らず、
た、田舎生育の六尺男を物いふ花の中央へ投げ込んで野暮の骨頂を弄ばんとの一
興、その林平を内々そつと供に召連れながら、當時流行の卷羽織に正平革の腰巾着、

面にも似合はぬ伽羅の匂ひを肌着に添へて、自己ばかりが寛活伊達の大盡風、

「林平、さア日本一の大門口に近づいたぞ、こゝが土手節の土手八町、うき世の外に通ひ路ぢや、は、は、は、」

林平は廣襟に白ぬき子持の横筋を染め出したる黒木綿の素袷、梵天帯に尻からけて腰に木刀一本、片手に糾鼻緒の替草履を掴みながら、甚之丞の影に從うて四邊を見廻せば、ふけゆく世間の夜も此里の夕暮、まして今は宵のうち、往來の前後に色餓鬼の亡者ぞろ／＼と立續いて、浮世の外に通ひ路と吐いたは時に取って面白き其身の前兆なれど、おのれやれと組んで捻ぢ伏せて思ふがまゝの冥途へ蹴込まん寸隙もなし、

「仰せられまする日本一の大門口、これで御坐りまする」

「あれ、あの萬燈の餘光、ほつと漏れて火事のやうに闇を破る入口ぢや、その大門を潜れば古今名筆の畫より脱け出した三千の美女、また五町街三界は目の球を射返さ

る、不夜城、腸に染み渡る色糸の音も聞えるぞ、うろ／＼狼狽へて早腰うち抜かすな、しかと胴骨を押し据ゑて供せい」

「はッ」

「たゞ見物ばかりの供で無いぞ、いつ何時この身の姿ごこへ消え失せても慌て、驚いて捜し廻るな、其方には別の座敷で酒も珍味も夜明しの飲み喰ひ次第ぢや、腹の蟲の宿替せぬやう用心せい」

「はッ」

紀州の果の片山里に育ちし匹夫ながらも勘治平、この江戸の空に日は浅くとも主従の契約、その知己の恩に報いんとて、名を變へ身を忍んで首尾よく怨敵の手許まで入り込みしが、流石に本國より連れ來りし譜代の若黨二人と下郎一疋の守護、加之も甚之

承め、きけば藩中の諸士に向うて剣道指南せし事もありとの風聞、うかく飛び付いて生涯一度の業を仕損ぜんよりは、あくまで心を許させし後、寸隙を窺ひ時機を覘うて一息に絞め殺さんとの覺悟、

をりからの僥倖、天の賜もの、この我を人知れぬ戀の通ひ路に伴うて、内々そつと屋敷の外に酒色の一夜を明さんとは、待ち受けし時節到來、これほごの注文は朝夕の佛神にも念じかねたり、おのれ賣女に魂魄を吸ひ取られて五體の骨節ふらくと海月のやうになつたるところを付け覘ひ、取つて押へて生面に怨念の青痰を吐いた上、ゆるゆる捻ぢ殺してくれんとの一心、

されど宵の途中は往來の人目に寸隙を得られず、聞き及ぶ大門を潜りて後も、生來ここに始めて足踏み入れし廓の不知案内、また思ひの外の華奢雑踏、けに不夜城の諺いづこの隅も隈々も白晝の如く、わけて大盡風の伊達騒動に猶更の寛活全盛、いよく

人垣に築かれて近寄る事さへ叶はぬのみか、幸ひ其遊興も果て、夜更けし頃は彼奴ごこに姿を隠せしやら、我たゞ一人、引手茶屋の一室に取殘されて、おめく明け行く空を無念の眼に睨みあけぬ、

遊里の習慣を知らざる我ながら、さても案外、あまりの空だのみ、この體では今後また幾度こゝに來るとも、何の甲斐なき彼奴が酒色の見物、屋敷のうちより却つて面倒なりと、勘治平おもはず舌鼓を打つて睨み廻す折しも、いづこよりか忽然と現はれ來りし甚之丞、きぬくの名殘惜しけに宿醉の寢惚面、

「や、林平、さうぢや、前夜の我等が全盛、傍で見ると目も眩ゆく自然の氣が浮いて面白からう、ようも魂魄を取止めて神妙にして居たぞ、第一あの御敵様を何と見た、ありや此廓で數ある中の音に聞えた名物、せめての冥加に近う寄つて身が肌を嗅いで見、前夜の移り香、今朝まで斯うぢや、きぬくの別れ際に二の腕を噛まれた

齒痕、や、徹へたぞ、徹へたぞ、は、は、は、は、

吐したりな此奴、その夜迷言きくための我で無いぞと思へごも、眼前に手足の詮方も無き苦笑ひ、

「はや、御歸邸で御坐りまするか」

「歸すは来るを待つとやら言ひ居った、は、は、は、は、さて歸る事は歸るが、宵と違うて朝の目目が面倒ぢや、林平、供に及ばぬ、ゆるく後より來い」

大門の外に待ち受けし用意の駕に飛び乗って、これも小判の勢ひで駆け行く眞一文字の影を、勘治平あつと呆れて見送りぬ、

たとひ大地を打つ槌は外るゝとも、時節到來、この大油斷を規はゞ彼奴の生命を取外すべき筈なしと、はや手に攪むが如く思ひし吉原の一夜も思ひの外空頼みに、人知れ

ぬ勘治平が猶更の無念、此上は夜半の夢に寢首を絞めてくれんと片唾を呑んで待ち受けぬ、

可憐ら酒色の巷に取遁せしより二日目、はや日は暮れて今しも夕飯の膳に對ひし折柄、奥の一室より甚之丞の聲、

「林平、林平」

はつと答へて其まゝ、箸を抛け捨てながら、臺所より走せ行きつゝ、奥の闕際に伺へば甚之丞、肱を枕に轉び寢の頤もて近う這ひ寄れとの體、

「いかう腰の邊へ氣が閉ぢ込んで堪らぬぞ、なれど世間なみくくの盲目按摩では手緩い身體ぢや、幸ひ林平、其方は力量があらう筈の奴、揉んでくれ」

「は、力量は兎も角、いかやうに揉んで御意に叶ひますやら、第一その業が」
「いや、醫者は病人に教へられる凡例ぢや、そこを揉め、こゝを揉めとの指圖はす

るぞ」

「其お指圖さへ下さりますれば」

「さア揉め」

「はッ」

勘治平、ずツと摺り寄ツて甚之丞が横に臥したる腰骨の上、そろく両手を掛けながら、わざと腕力を偷んで揉み始めぬ、

「この邊で御坐りまするか」

「いや、左、左、その手の左、まだ左の方ぢや」

「如何で御坐りまするか」

「む、其處ぢや、なれど林平、案外に徹へぬぞ、療治に會釋は入らぬ、力量を出せ、ぐツと出せ」

勘治平は揉みながら思はず首を差伸ばして、そツと甚之丞の面を覗けば、さも心地よけに肱枕のまゝ、目を閉ぢし體、

おのれ、この林平を何物と心得てか、幸ひ兩刀は離れて床の間の刀架、加之も其小刀は見る毎に朝夕の我腸を斷つ故主の記念、まして五體を横たへながら我手に任せしのみか、わざと力量を出せと吐すは自滅の運命、このまゝ組み付いて咽喉笛を捻ぢ切らんと思ひしが、まだ宵のうちの兩隣屋、一室の彼方に二人の若黨奴が夕飯の折柄、されど一度ならず二度までも現在の我手に入りし此奴、みすく無事に生き漏らすも心外の至極、せめて後日のため今こゝに總身の力業、腰骨を碎くほどの荒療治してくれんと、勘治平、餘所ながらの空笑ひ、

「これで少しは、御意に叶ひまするか」

「なるほご、力量はある、なれど林平、六尺肥滿の割合に足らぬぞ」

「いや、實は手加減を致して居ります事、もし出る力を出しますれば、恐れながら」
 「何といふ、出るだけの力を出せば骨でも損ねるとか、は、は、他は知らず、この大
 泉甚之丞、幼少より武道一流で、鐵の如く取固めた五體ぢや、鋤鍬で修行の百姓
 力量では林平、は、は、兎も角も出るだけ出して見い」

名を變へ姿を秘して多年いづこの里に忍び居るやら、雲を掴むが如き怨敵さへ千辛萬
 苦の曉に搜し出して天晴れ本望を遂ぐるものあり、さるを今こゝに現在その怨敵の
 懷中へ入り込みて朝夕たえず近づくのみか、腰を揉めとて横たへしまゝの五體を我手
 に任されながら、加之も六尺大兵の割合には力の足らぬ奴といはれし勘治平、
 なれど襖を隔て、譜代の若黨二人が夕飯の折柄、まだ宵の兩隣屋より朋輩うち寄りて
 小謠の漏れ来る折柄、まして本人の甚之丞めは藩中の諸士へ武道の指南せし事ありと

の奴、我は只これ業も術も知らざる片田舎の百姓力量、

甚之丞いよく笑ひながらの肱枕、

「林平、それが出るだけの力量か」

「いや、まだ實は、聊か手加減を致して居りまする」

「何、まだ手加減をして居るとな此奴、は、は、は、もはや揉療治に及ばぬ、たゞ力量だ
 け出して見い」

「お氣に觸りませうかは存じませぬが、下郎め、國元の田舎に居りまする節、かやう
 な一時の座興から、おもはず人間一人を不具に致しまして」

「こりや林平、それは其方等が分相應の逸興から出來た過失、高が百姓同士の事ぢや、
 は、は、其方よりは身材で三四寸、體量で四五貫も不足ながら、武道鍛鍊の腰骨を
 備へた甚之丞、は、は、は、まづ不具にする氣で掴んで見い、もし萬が一、堪へ兼ね